

第27図 C-4区出土土器実測図 (その2)(第6表参照)

第6表 第1次調査出土土器・陶磁器観察表 (C-4区その2)

完(11X 7D			5・陶幽奋観祭表(C-4区で0)2) 			
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
1		C-4-イ・ 床面土器群	土師甕口縁部	1	外:肩部に列点文、ヨ コナデ、風化のためミ ガキの有無不明 内:ヨコナデ、ヘラケ ズリ	①普通1mm程度の砂粒を 多く含む ②淡黄褐色〜クリーム色 の地に暗灰色の汚れ?③ 良好	
2		C-4-イ・ Ⅱ層中部	土師甕 口縁部	口径 20 cm	外:ナデ 内:ナデ	①石英を少量含む ②茶褐色 ③良好	
3		C-4 −ロ・ Ⅱ層中部	土師甕 口縁部	口径不明	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②茶褐色 ③良好	
4		C-4−ニ・ LT・EW – BⅡ層中部	土師甕 口縁部		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②明黄茶色 ③良好	
5		C-4−ハ・ Ⅱ層中部	土師甕 口縁部	口径不明	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①微石粒を含む ②淡黄白色 ③良好	
6		C-4-ロ・ Ⅱ層中部	土師甕口縁部	口径不明	外:ナナメ方向のナデ 内:ヨコナデ	①1m程度の砂粒を含む ②淡黄灰茶色 ③良好	
7		C-4 -□· Ⅱ層中部	土師甕口縁部	口径30.0 cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①あまり砂粒を含まない ②黄白褐色 ③良好	
8		C-4-口· Ⅱ層中部	土師甕 口縁部	口径 19.4 cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②明茶褐色 ③良好	
9		C−4 −口・ Ⅱ層中部	土師甕 口縁部	口径 16.0 cm	外:ナデ 内:ナデ	①0.5~3mm程度の砂粒を 含む ②内;明黄白色、外;明 黄茶色 ③良好	
10		住居内・Ⅱ -③層	土師壺 口縁部	口径 16.0 cm	外:ナデ、ヘラケズリ 内:ヨコナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②内;淡灰褐色、外;淡 黄褐色 ③良好	
11		C-4-□· NS-B·Ⅱ -④	土師 甕 頸部~ 口縁部 ?	口径不明	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②内;淡灰褐色、外;淡 黄褐色 ③良好	
12		C-4・黒色 土層(Ⅱ層)	土師甕 口縁部	口径 18.0 cm	外:ナデ、ヘラミガキ 内:ヨコナデ、ケズリ	①1mm前後の砂粒及び微砂粒を含む ②淡灰白茶褐色 ③良好	

420.000	Ţ		1	T	Γ	T	T
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)		①胎土②色調③焼成	備考
13		C-4·NS- B 交差部· Ⅱ - ③層	土師 甕 上胴部	不明	外:ナナメ方向のハケ の上に沈線文 内:上部タテハケ後ナ デ,下部にナナメ方向 のケズリ	①1~3m程度の砂粒を 多く含む ②暗黄橙色 ③良好	
14		C-4 · NS- B	土師高 坏坏~ 脚境	不明	外:ヨコナデ 内:ナデ	①1m以下の砂粒を少量 含む ②内;淡黄橙色,外;黄 橙色 ③良好	
15		C-4 · B 交 差部 · Ⅱ - ③層	須恵器 坏・蓋	不明	外:回転ナデ、回転ケ ズリ? 内:回転ナデ	①0.5~1mm程度の砂粒を 含む ②灰色 ③良好	
16		C-4-ニ・ I 層	須恵器 坏・蓋	不明	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①砂粒がほとんど含まな い ②灰色 ③良好	
17		C-4-二・ 表採	須恵器 坏身 底部	底径 8.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②灰白色 ③良好	
18		C-4-ニ・ 表採	須恵器 鉢 口縁部	口径 24.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密、0.5mm前後の砂粒 を少量含む ②灰褐色 ③良好	東播系
19		C-4−ハ・ Ⅱ層	須恵器 鉢 口縁部	口径 28.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ケズリ	①密、0.5~1mmの白色砂 粒を含む ②灰褐色 ③良好	東播系
20		C-4-□· Ⅱ層	陶磁器 碗 口縁部	口径 7.0 cm	外:染付	①密 ②白色,染付;藍色 ③良好	伊万里 系
21		C−4 −□· 拡張区・Ⅱ 層上部	陶磁器 碗 口縁部	口径 7.0 cm	外:染付	①密 ②白色,染付;藍色 ③良好	20 と同 一固体
22		C-4-口· I層	陶磁器 碗底部	高台径 3.0cm	外:施釉 内:施釉	①密 ②素地;灰白色, 釉;淡緑色 ③良好	
23		C-4·EW -B(2号住居 址外)	陶磁器 碗底部	高台径 4.0 cm	外:施釉 内:施釉	①密 ②素地;灰白色, 釉;淡黄緑色 ③良好	石見焼
24		C-4·EW -B(2号住居 址外)	陶磁器 碗底部	高台径 4.0cm	外:施釉 内:施釉、鉄釉による 文様	①密 ②素地;褐白色、釉;灰 緑色、鉄釉;茶褐色 ③良好	石見焼

挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
25		C-4·EW -B(2号住居 址外)	陶磁器 鉢 口縁部	口径不明	玉縁をもつ、外: 施釉 内: 施釉	①密 ②釉;灰緑色 ③良好	石見焼
26		C-4-□· Ⅱ層	陶磁器 鉢 口縁部	口径不明	玉縁をもつ、外: 施釉 内: 施釉	①密 ②釉;黄褐色 ③良好	石見焼

堅緻。

[考察]

本住居址は、平面形が不整六角形で規模は小さい。所属時期は、弥生時代末期ないし古墳時代初期と考えられる。

構造上の特徴は、床面に柱穴が見当たらないことから木を傘状に葺き降した上屋であったと考えられる。周壁等の存在は確認できないが、掘り込み面はあまり高位にあったとは考えられず、木・茅類を結束した壁をつくっていた可能性もある。中央ピットは、いろり的な機能をもっていたと考える。

本住居址の廃絶の事情については、床面中央部に残された完形の甕形土器上に径40cm程の大石が直接載っていたことや、床面一帯に川原石が散乱していたことなどから長田川の洪水の濁流の直撃によって崩壊したと考える。

(増野晋次)

(3)第3号住居址(第28図, PL.15下)

〔検出状況〕

本住居址は、D-4区の南側中央部から D-3区の北端において検出された。全体の遺存状態はかなり悪い。壁は北東〜北側にかけて認められ、北西〜南側は欠失している。壁も高さ $6\sim16$ cm 前後残存しているに過ぎない。床面には円礫が数個残っていた。

住居址内の埋土の層序は次のとおりである。

I 層: I. ① 耕作土

- I,② 明赤褐色土層(床土)
- Ⅰ,③ 明灰青色土層(赤褐色粒を含む、旧耕作土)
- I, ④ 暗赤褐色砂質土層(旧床土)
- I. ⑤ 黒褐色土層
- I, ⑥ 褐色砂質土層

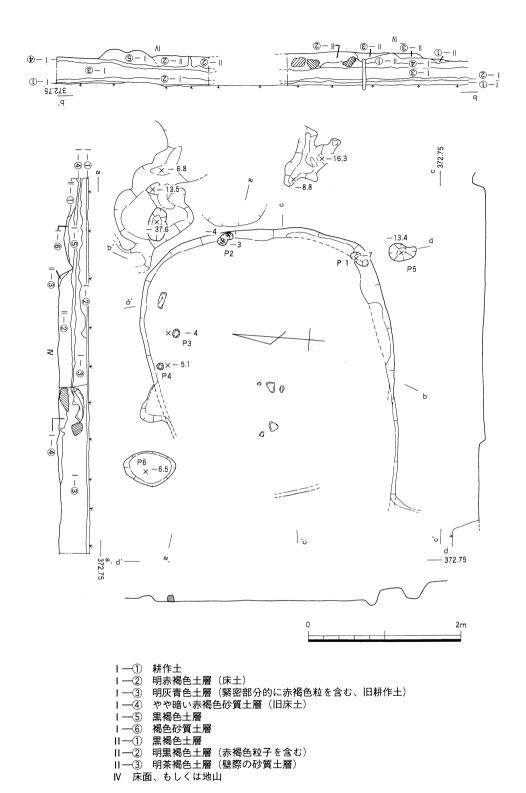
Ⅱ層:Ⅱ、① 黒褐色土層

- Ⅱ,② 明黒褐色土層(赤褐色粒子を含む)
- Ⅱ,③ 明茶褐色土層(壁際の砂質土)

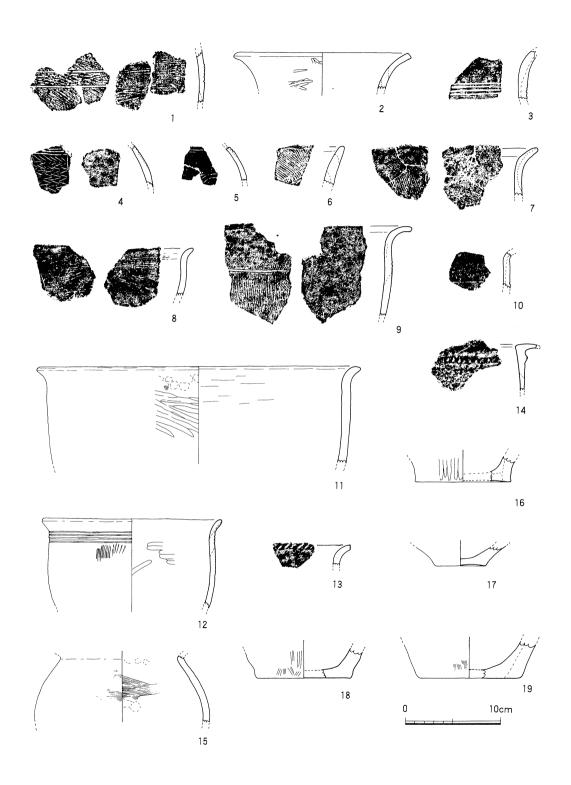
Ⅳ層: 基盤層(地山)

I −⑤~⑥層は住居址の東側(D-4区南東~C-4区南西のイ、ロ小区など)で検出された多数の凹部内に堆積した土層で、遺物包含層である。包含された遺物は弥生土器、土師器、須恵器、中・近世陶磁器類などである。

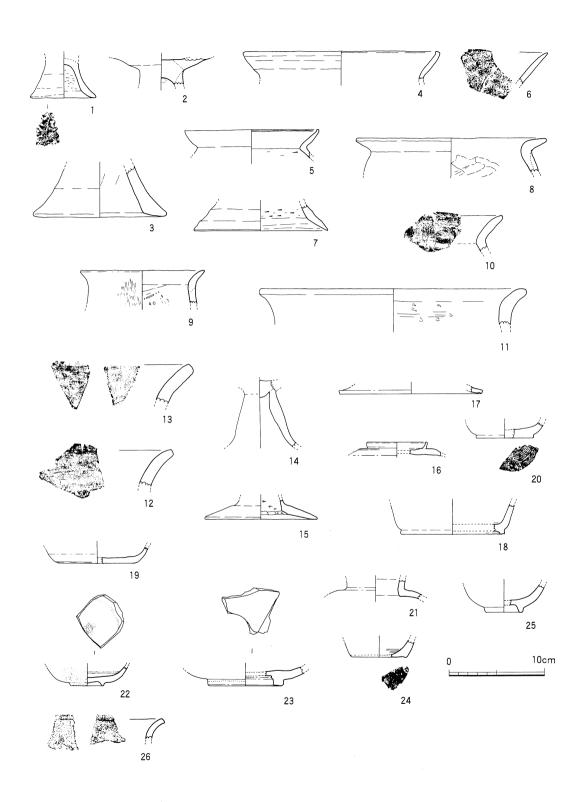
Ⅱ層は、住居址内の覆土で、遺物包含層。住居址の東半分に残っていた。



第28図 第3号住居址平面図・断面図



第29図 D-4区出土土器実測図 (その1)(第7表参照)



第30図 D-4区出土土器・陶磁器実測図 (その2)(第8表参照)

[平面・断面形]

平面形は隅円長方形かと思われるが、半分を欠失しているので断言はできない。断面形についても多くのことはわからない。やや保存状態のよい北東辺についてみると壁は逆台形様をなしていたようにみえる。本来壁高はあまり高くはなかったことが、断面の状態から推測される。規模は推定復元で、長軸北東一南西約3.5 m、短軸約3.2 m 程度と思われる。面積は約8㎡。

〔柱穴・炉址〕

炉址と思われる遺構は検出されていない。主柱穴と考えられるようなピットも存在しないが、 円~楕円状のピットが住居址の円外から検出されている。形状は次のとおりである。

〔住居址内のピット〕

- P1;口径は長軸で24cm、短軸で13cmの楕円形を呈す。床面からの深さは7cm。壁体斜面中に 位置し、壁留材を支えに杭木を立てた跡の可能性もあるかと考えられる。
- P2; 瓢形を呈するピット。壁体の斜面中のものは、床面からの深さが4cm。壁と床面の接する地点に位置するものは床面からの深さ3cmである。P1同様、壁体を支える杭木を立てたピットの可能性がある。
- P3;口径10~12cmのやや不整な円形を呈している。床面からの深さは4cm。柱穴の可能性もあるが他に柱穴と考えられるようなピットは検出されていないので、性格は不明とするほかはない。
- P4;口径10cmの不整な楕円形を呈している。壁から5cmの地点に位置し、床面からの深さは5.1 cm。壁体を支える杭木を立てたピットの可能性がある。

「住居址外のピット」

- P5;住居址東南隅の方向にあり、長軸38cm、短軸25cmの不整な楕円形を呈する。深さ13.4cm。 後世に穿たれた可能性もあり、性格は不明。尚、出土物はない。
- P6;住居址北側の壁体の延長線上、住居址の北西方向に位置し、長軸70cm、短軸47cmの楕円 形を呈す。深さは6.5cm。出土物はなかった。性格は不明である。

〔「ピット」群〕

本住居址の北側(D-4区~C-4区)からは蜂巣状に多数の浅いピットや凹状の陥ち込みが砂質の基盤層から検出されている。平面形は不定で、規模も大小様々である。その埋土は砂質の褐色ないし黒褐色土で、住居址の埋土とは異なる。いろんな時代の遺物が包含されていることなどを勘案すると砂質基盤層上面が浸蝕されてできたピットや凹部のように思われる。

〔出土遺物〕

(縄文土器)(第29図-1~2、PL.22)

1は粗製の深鉢の胴部片かと思われる。外面には斜め方向に二枚貝の殻による条痕文を施し、その上に2本の平行沈線を巡らせ、中間に3段の列点文を施している。内面は二枚貝の殻による条痕文が施される。胎土には2m以下の砂粒が含まれる。焼成良好。

第7表 第1次調査出土土器・陶磁器観察表 (D-4区その1)

	/衣 			苗・岡幽苗観祭衣(D-4区でり1)					
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考		
1	PL.22	D-4 −イ・ Ⅱ層上部	縄文甕 粗製	不明	外:貝殻条痕文、2条 の直線文の間に列点文 内:貝殻条痕文	①3m以下の砂粒を含む ②淡茶褐色 ③良好			
2		D-4-イ・ Ⅱ層上部	土師壺口縁部	口径18.0 cm	外:ナデ後ミガキ 内:ナデ	①1〜2mmの石英を含む ②明黄白色 ③良好			
3	PL.22	D−4 −イ・ Ⅱ層	弥生壺 頚部~ 口縁部	不明	外:5条のヘラ描き直 線文、ヨコナデ 内:ヨコナデ	①2mm程度の粗砂を小量 含む ②淡黄褐色 ③良好			
4	PL.22	D-4 −イ・ Ⅱ層上部	弥生壺 肩~胴 部	不明	外:3条のヘラ描き直線文、5条のヘラ描き羽状文内:ヘラミガキ	①2mm以下の砂粒を含む ②黄橙色 ③良好			
5		D-4-ロ・ Ⅲ層 pit 内 包含層	弥生壺 胴部	不明	外:ヨコ方向のヘラミ ガキ、2条のヘラ描き 直線文、2条の重弧文 内:ナデか?風化著し く不明	①2mm以下の砂粒を含む ②淡黄橙色 ③良好			
6		D-4 -ロ・ II 層上部	弥生鉢 口縁部	口径不明	外:念入りなタテハケ 内:ナデ	①1m程度の細砂を小量 含む ②淡黄褐色 ③良好			
7		D-4 −イ・ 南拡張区・ Ⅱ 層上部	弥生 甕 口縁部	口径19.0 cm	外:ナデ、ナデ後ハケ 内:ヨコナデ	①1mm程度の砂粒を含む ②内;灰茶褐色、外;黄 灰褐色、一部赤褐色あり ③良好			
8		D−4 −イ・ Ⅱ層	弥生鉢 口縁部	口径30.0 cm	外:ナナメハケ、ヨコ ナデ 内:ヨコかナナメのハ ケ、ヨコナデ、指頭圧 痕	①1mm程度の砂粒を含む ②内;黄茶褐色、外;明 白黄色 ③良好			
9	PL.22	D-4 -イ・ 南拡張区・ I層上部	弥生 甕 口縁部	口径不明	外:1条のヘラ描き直 線文、ヨコナデ、ナナ メハケ 内:ヨコナデ、ナナメ ハケ	①3mm以下の砂粒を多く 含む ②黄褐色 ③良好			
10		B · Ⅱ -④	弥生甕 口縁~ 胴部境	不明	外:1条のヘラ描き直 線文、ナデ 内:ナデ	①0.5~2mm程度の砂粒及 び金雲母を含む ②内;灰茶褐色、外;黄 茶褐色 ③良好			

+ ≰ [an			T	T		T	
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
11	PL 22	D-4-ニ・ 西拡張区・ 床面 pit	弥生 甕 口縁部		外:ナデ後ヘラ状工具 によるミガキ 内:ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②内;灰褐色、口縁部; 淡灰黄褐色、外;淡黄灰 褐色 ③良好	
12	PL 22	D-4-ニ・ 西拡張区・ 床面 pit	弥生甕 口縁~ 胴部	口径19.0 cm	外:4条のヘラ描き直 線文、タテハケ、ナデ 内:ヘラミガキ	①0.2mm以下の砂粒を含む ②暗灰褐色 ③良好	
13		D–4 −イ・ Ⅱ層上部	弥生 甕 口縁部	口径22.0 cm	外:口縁端部にヘラ状 工具による刻み目、ヨ コナデ .内:ヨコナデ	①0.5~1mmの砂粒を小量 含む ②黄橙色 ③良好	
14	PL 22	D-4 −ハ・ Ⅱ層上部	弥生 甕 口縁部	口径39.0 cm	外:屈曲部下に刻み目 のある断面三角形の突 帯 内:ナデ	①0.5~3mm程度の砂粒 (雲母、石英)を含む ②淡黄白褐色 ③良好	
15		D-4-□· Ⅱ層	弥生鉢 上胴部	不明	外:ヨコハケ後ナデ 内:ヨコハケ後ナデ	①密 ②淡黄色、褐色 ③良好	
16		D-4-ニ・ N-B・Ⅱ -②層	弥生甕 底部	口径10.0 cm	外:ナデ後タテ方向の ヘラミガキ 内:ナデ	①密 ②内;明黄白色、外;灰 褐色 ③良好	
17		D-4-イ・ 南側拡張 区・Ⅱ層	弥生壺 底部	底径 5.0 cm	外:風化が激しく明瞭 でない 内:ケズリ後ナデ	①1mm程 度 の 砂 粒(石 英)を含む ②白黄茶褐色 ③良好	
18		D−4 −イ・ Ⅱ層上部	弥生壺 底部	底径10.0 cm	外:タテハケ(方向一 定でない。風化激しい。) 内:ナデ	①1~4mmの石英をまば らに含む ②内;灰褐色、外;淡黄 茶褐色 ③良好	
19		D-4-ロ・ Ⅱ-③層よ り掘込み (蜂の巣状) pit内包含層	弥生壺 底部	底径11.0 cm	外:ナデ後タテハケ (風化が著しい) 内:ナデ	①0.5~3mm程度の砂粒を 多量に含む ②内;黄茶褐色、外;橙 茶褐色 ③普通	

第8表 第1次調査出土土器・陶磁器観察表 (D-4区その2)

7,50	2 为1次则且山土工品			1 -5 444 00 4	元宗弘 (5 15 652)		
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
1	PL.21	D−4 −イ・ Ⅲ層凹部 黒色土層	弥生 甕 脚台部	脚径 9.0 cm	外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ、ヨコ ナデ	①3mm以下の砂粒を含む ②淡黄褐色 ③良好	
2	PL.21 下段	D-4 -ハ・ II -④層	弥生高 坏脚~ 坏部	脚径不明	外:ナデ 内:ナデ	①2~5mm程度の砂粒を 含む ②淡褐色 ③良好	
3		D−4 −イ・ Ⅱ層上部	弥生高 坏脚部	脚径 14.0 cm	外:ヨコナデ 内:ナデ	①1~2mm程度の砂粒を 含む ②明黄茶褐色 ③良好	
4		D-4·NS- B·II-③ 層	土師甕 口縁部	口径 20.6 cm	外:ナデ、胴部ヘラケ ズリ 内:ナデ、胴部ヘラケ ズリ	①微砂粒及び金雲母を含む②灰黄褐色③良好	
5		D-4 −ニ・ Ⅱ層上部	土師甕 口縁部	口径 14.0 cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケ ズリ	①1mm前後の砂粒を含む ②白黄茶色 ③良好	
6		D-4 −イ・ Ⅱ層上部	土師壺 口縁部	口径不明	外:ナデ 内:ヨコナデ	①0.5mmの砂粒を含む ②白黄色 ③良好	
7		D-4 −イ・ Ⅱ層上部	土師高 坏・脚 裾部		外:ナデ 内:ヨコナデ、ケズリ	①0.5m程度の砂粒を含む ②口縁部;黄土色、他; 明茶色 ③良好	
8		D-4-イ· 南拡張区· 3号住居· Ⅱ層	土師甕 口縁部	1	外:ナデ 内:ナデ、ヘラミガキ	①密 ②内;灰褐色、外;灰茶 褐色 ③良好	
9		B-2-ハ・ II 層	土師甕 口縁部	口径13.0 cm	外:ヨコナデ後胴部タ テハケ 内:ヨコナデ、ヘラケ ズリ	①微砂粒を含む ②内;淡黄茶褐色、外: 淡橙茶褐色 ③良好	
10		D-4 −イ・ Ⅱ層上部	土師甕 口縁部	1	外:ナデ 内:ヨコナデ	①1~3mmの石英及び微砂粒を含む ②淡茶褐色 ③良好	
11		D-4 −イ・ Ⅱ層上部	土師甕口縁部	1	外:ナデ 内:ナデ	①密、雲母を含む ②灰褐色 ③良好	
12		D-4-二· 南拡張区· Ⅱ層下部	土師壺 口縁部	ł	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①0.5~1mm前後の石英を 小量含む ②淡茶褐色 ③良好	

15.00	ı	T	T	T			1
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	は 備考
13		D-4 −イ・ Ⅱ層上部	土師甕 口縁部	1	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①0.5~2mm程度の砂粒を 含む ②茶褐色 ③良好	
14	PL.21 下段	D-4 -ロ・ II層上部	土師高 坏脚部	1 1/1/11/1	外:ヨコナデ、ヘラミ ガキ 内:ヨコナデ	①微砂粒を含む②黄橙色③良好	
15		D-4 -二・ Ⅱ層上部	土師高 坏脚部		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラミ ガキ	①密 ②灰赤茶色 ③良好	
16	PL.21 下段	D-4 -イ・ 南拡張区・ I層	須恵器坏・蓋	l	外:回転ナデ 内:回転ナデ、つまみ は貼りつけ	①ほとんど砂粒を含まな い ②灰色 ③良好	
17		D-4 −ハ・ Ⅱ層上部	須恵器 坏・蓋	口径15.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②灰色 ③良好	
18	PL.21 下段	D-4-ロ·II - ③層 (蜂 の巣状)pit 内包含層	須恵器 坏底部	底径11.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②灰色 ③良好	
19	PL.21 下段	D–4·Ⅱ層	須恵器 無高台 の坏	底径12.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①微砂粒を含む②灰色③良好	
20	PL.21 下段	D-4 · I 層	須恵器 碗底部	底径 6.0 cm	外:回転ナデ、糸切り 痕あり 内:回転ナデ	①0.5~2mm前後の砂粒を 含む ②内:灰黒褐色、外;灰 褐色 ③良好	回転糸切
21	PL.21 下段	D-4-二・ NS - B 拡 張区・II - ②層	須恵器 壺頚部 ~胴上	径 6.0 cm	外 : ナデ 内 : 回転ナデ	①密 ②灰黒色 ③良好	
22		D-4·I 層	陶磁器 碗底部	高台径 3.6cm	外: 染付、 内: 染付	①密 ②青白色、染付;藍色 ③良好	伊万里 系江戸 中頃
23		7月1日 4万5日 X 1		高台径 8.0cm	外:施釉 内:施釉、鉄釉による 文様	①密 ②釉;淡緑色、鉄釉;こ げ茶色 ③良好	石見焼
24		四側が帰る		底径 6.0 cm	外:施釉 (底部はかか らない) 内:施釉	①密 ②素地;淡黄褐色、 釉;黄灰色 ③良好	石見焼 ?

挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
25		D-4-ハ・ 西側拡張区 ・I-b層 下部	陶磁器 碗底部	高台径 4.0cm	外:施釉 内:施釉	①密 ②内釉;淡青緑色, 外釉;調淡灰色 ③良好	
26		D-4・南拡 張区・床面	土師 甕?	口径不明	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	①密 ②淡黄褐色 ③良	

(弥生土器)(第29図-3~19、第30図-1~3、PL.21下、22)

3~5は前期の壷の破片である。3は頚部から口縁部に至る破片で、端部を欠く。頚部には5本以上のヘラ描き直線文を巡らす。調整は内外面共にナデである。4、5は上胴部片。4は外面に3本のヘラ描き直線文を巡らし、その下位に5段以上のヘラ描き羽状文を施す。この羽状文群はまた縦方向のヘラ描き直線文によって区画されているが、区画数等は不明。調整は外面ナデ、内面はヘラミガキである。5は肩部に段をもち、段下方に2条のヘラ描き直線文を巡らし、さらにその下位には2条の重弧文が施されている。調整は外面が横方向のヘラミガキ、内面は風化のため不明。

6は鉢の口縁部かと思われる。外面は入念な縦方向のハケメを施し、内面はナデ調整である。前期のものであろう。7~12は前期の甕の破片である。いずれも口縁部断面が如意状を呈し、口縁下方に1本のへラ描き沈線を巡らすもの(9、10)、4本のヘラ描き沈線文を巡らすもの(12)がある。7、8、11は外面無文。調整は口縁外面がヨコナデ、頚部~胴部に縦方向のハケメを施すものが殆どであるが、8のようにヨコナデを行うもの、11のようにヘラミガキを施す例もある。内面は横方向、斜め方向のハケメを施すもの(8、9)、ヘラミガキのもの(12)、ナデのもの(10、11)がある。胎土は3mm以下の砂粒を含むもの(9、12)と1mm以下の砂粒を含むものがある。焼成はいずれも良好である。13も前期の甕の口縁片である。口唇部に刻目が施されている。調整は内外面共にヨコナデで仕上げる。胎土には1mm程度の砂粒を含む。

14は中期の甕の破片である。口縁部が逆「L」の字状をなし、口縁直下に刻目を施した断面三角形の突帯を巡らしている。器面調整は内外面共にナデ。15は鉢の胴部中位から肩部にかけての破片である。内外面共に横方向のハケメを施した後に肩部内外をヨコナデしている。胎土は14が3mm以下の砂粒を、15が1mm以下の砂粒をそれぞれ含んでいる。焼成はいずれも良好である。

 $16\sim19$ は壷あるいは甕の底部で、上底気味のもの(16、17)と平底のもの(18、19)がある。調整は外面に縦方向のヘラミガキを施すもの(16)と縦方向のハケメのもの(18、19)がある。胎土は18 mm以下の砂粒を多く含むもの(18、19)と18 mm以下の砂粒を含むもの(16、17)がある。焼成は19がや悪い以外は良好である。

第30図-1は高坏の脚と思われるものである。「ハ」の字形に開き、調整は外面及び内面下部はヨコナデ、内面の上部はヘラケズリである。胎土は3mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

2、3も高坏の破片で、2は脚部と坏部の境界部分である。脚の接合方法は坏部、脚部を別々につくって両者を接合するものである。3は脚部でゆるやかに「ハ」の字形に開く器形である。1、3は古墳時代初頭の可能性もある。調整はナデ。胎土は3mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

(土師器)(第30図-4~6、8~15、26、PL.21下)

第30図-4~6、8~13、26は甕の口縁片である。口縁端部のつくりは、上方にはねあげるもの(4、5)、尖り気味になるもの(6)、丸くおさめるもの(8~12)、ゆるやかな面をもつもの(13、26)がある。調整はいずれも口縁部内外面はヨコナデ、体部内面にはヘラケズリを施す。体部内面をヨコナデする10があるが、これはヘラケケズリが体部と口縁部の境界付近まで達していないことも考えられる。9は小型品で口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面には縦方向のハケメ、内面にはヘラケズリが施される。胎土は10、11、13が2m以下の砂粒を、その他は1m以下の砂粒を含み、大型品に胎土の粗いものが多い。焼成はいずれも良好である。

7、14、15は高坏片である。14は脚部片。脚部と坏部の接続方法は坏部の底部を充填するもので、充填した粘土が脚内で肥厚している。7、15は脚の裾部であり、15は端部に面をもつ。調整は内外面共にヨコナデで、柱状部内面にはヘラケズリを施す。胎土はいずれも1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

(須恵器)(第30図-16~21、PL.21下)

16、17は蓋坏の破片である。16は天井部で、輪状つまみを持つ。17は口縁端部が内傾して下垂するものである。18は蓋坏の坏片である。底部と体部の境界付近に内面接地の底部に逆凹状をなす低い高台がつく。調整は内外面共に回転ナデである。19は無高台の坏の底部である。調整は外面底部は回転ヘラケズリ、その他の部分は回転ナデである。20は坏あるいは碗の底部で、平底をなし、糸切り痕が残る。底部以外の調整は回転ナデである。いずれも奈良時代末期から平安時代前葉の所産と考えられる。

21は壷の肩部と頚部の境界部分である。調整は内外面共に回転ナデである。胎土はいずれも1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。平安時代前葉のものであろう。

(陶磁器)(第30図-22~25)

22は江戸時代中頃の伊万里焼の碗の底部片であり、低い高台をもつ。胎土は灰白色を呈し、青みがかった透明の釉が施される。染付は青・藍色で外面には高台・体部の境界に圏線が、内面には見込みと体部の境界に2本の圏線、見込みに五弁花文が施されている。23、24は石見焼で、幕末から明治時代にかけてのものである。23は皿で、しっかりとした削り出し高台をもつ。胎土は淡灰褐色を呈し、緑がかった透明感のある釉が高台とその内側を除く部分に施される。内面には鉄釉によるこげ茶色の文様が施される。

24は壷の底部と思われるものであり、黄褐色の胎土の上にやや黄灰色がかった透明の釉が施される。調整は底部は糸切り、それ以外の部分は回転ナデである。25は碗の底部である。胎土

は灰褐色を呈し、外面には淡灰色の不透明な釉が、内面には緑がかった釉が施される。高台畳付には釉がかかっていない。胎土はいずれも砂粒をほとんど含まない精良なものである。

「老窓)

本住居址は、平面形が隅円長方形で、小規模な住居址である。所属時期は古墳時代前期と考えられる。構造的には、床面から明確な柱穴らしいものが検出されず、この点からは、2号住居址同様の上屋構造が推定されよう。

炉址等の存在も確認されなかったが、床面の保存状態から比較的良好であった北半分の範囲で検出されなかったということは、本来明確な炉は屋内にはなかったのかも知れない。その点で屋外調査を想定してもよいと思われる。

(增野晋次, 田浪文雄)

(4)B-2~B-3中間区、B-3区

<B-2~B-3中間区>(第16図、PL.13下)

イ、ロ小区の二個所を発掘した。検出された遺構は大小のピットであるが、これらの個々がどのような機能を有したものかについては明確にいえない。検出状態を確認しておくならば、イ小区で検出されたピットは円形と不整楕円形を呈し、P1は口径の大きい盤状ピット、P2は方形状の大型割石がピット内に陥入したような状態で検出している。形状は浅い盤状をなしている。P3は不整楕円形で、ピット底には小石がみられた。

ロ小区のピットは、いずれも浅い皿状のものであった。この小区では、大小の川原石や割石が ブロックをなして検出されている。これらが果たして遺構かどうかは確定し難い。

以上のイ、ロ小区のピットや石群は、暗黄褐色砂質土層(IV層)上を面として存在しており、この面に掘り込む、あるいは据えたような状況をなしている。また面自体は平坦で固められたようにも思われ、ある時期の生活面と理解しておく。おそらく、1-b 号住居址の周縁で検出されたピットや石囲い状遺構もこれらと結びつく可能性がある。

<B-3区>(第15-1図、第15-2図)

イ〜ニの各小区からいくつかのピットを検出している。これらは形状、口径、深さにおいて様々で、その機能を確定することは困難であるが、柱穴としてよいものもある。但し、これを手掛かりにした建物の想定復元はできない。

ピット群は、また暗黄褐色土層(IV層・地山)面から掘り込まれたものと、IV層上部に堆積した礫を多く含む層の上面から掘り込まれたものの二者があり、2時期にわたる遺構群として把握される。

〔出土遺物〕

B-2~B-3中間区、B-3区では少量の陶磁器片が出土している。その説明は第47図の項で行う。

(5)ピット群 (第40図、PL.16上)

第1次、第2次調査において多くのピットを検出している。B 区の例については、第1号住居址 との関係で既述したので、ここでは第2次調査の際に検出されたF-3区とF-4区、G-3区とG-4区、G-4区、G-4区のピット群について記載事項をあげておく。

〈F-3区、F-4区のピット群〉(第31図、PL.17上)

この両区にまたがって南北約18 m、東西約6 m の範囲から37個のピットを検出している。

ピットの径は $18\sim75$ cm、同じく深さは $5\sim40$ cmに及んでいて、大小さまざまの様相を呈している。いうまでもなく同一時期に共存したとは到底思えないが、分布で見る限りではP16、P15、P11、P26、P27、P24の各ピットが芯々間隔で約70cmの距離で長方形に配列されている。2間×2間の建物を想定することもできるが、各ピットの規模がまちまちであることからすれば、これらが1棟の柱穴群であった可能性はあまり高くない。あるいはP19を北側の起点としてP35、P36を南端とする柵列を考定することも可能かと思われるが、積極的な左証はない。念のため、ピットの上径(検出面のもの)と深さ(検出面下)の相関をみるために表とグラフを作成したが規則性のあるグルーピングを行うことはできなかった。

時期としては、奈良末~平安時代前半頃の須恵器片が坑中から検出された例もあるので、この 時期以降のものとする考え方を採用する道もある。

〈G-3区のピット群〉(第32図、PL.16上)

18個のピットが検出されている。検出面(IV層上面)での形状と上縁の大きさは、次の如くである。形状は円形、不整楕円形、上縁径は20cmから70cm程度。深さは6.8cmから41.9cmを測る。 重複する例、二段掘り状の例等がみられる。

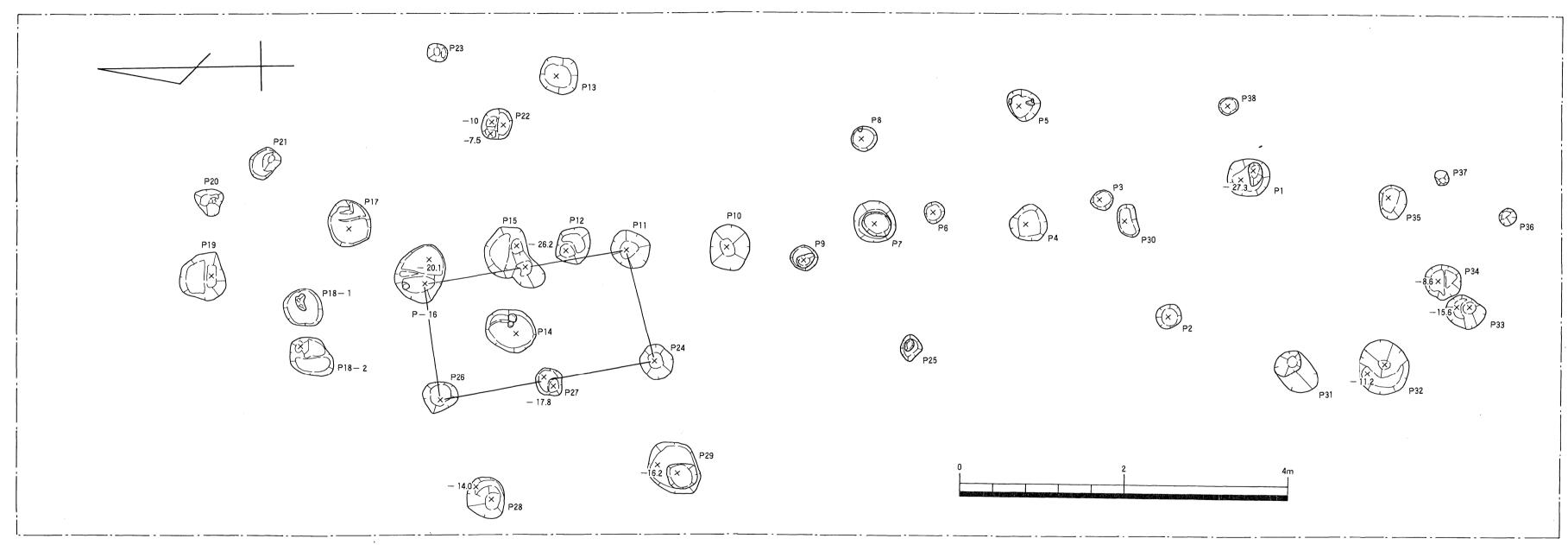
性格としては、なんらかの建物にともなう柱穴の可能性が考えられるが、分布状況から建物を想定することは困難である。例えば、P7、P8、P9、P10の一群はひとまとまりの柱穴群として捉えられるようにも思えるが、長方形の建物を想定することは難しい。

性格不詳とする外はない。

〈G-4区のピット群〉(第33図)

41個のピットが検出されている。その中の約1/3が深さ10cm(検出面より)未満の小規模ピットである。この区では黒褐色を呈する遺物包含層(II層)はこの層中より検出されている。形状は円形、楕円形が主体で、不定形なものもある。注意されるのは、 $P17\sim P38$ のピット群が円状(径約2.8 m)に分布していることである。深さもI0cmからI00cm程度であり、あるいは円形住居址の柱穴群かとも考えられる。I010I016も小規模な円形状に分布していて注目される。しかし年代等は不明である。

この区で検出された土器は弥生前期のものが多く、他に土師器や須恵器、石鏃等が出土している。



X印:深さ測定点(単位:cm) 各ピットの深さは第9図に示した。図中Xは重複ピットについての深さ測定点。数値はその深さを示す。

第31図 F-3、F-4区ピット群平面図

第9表 F-3 F-4区ピット一覧表

Pit 番号	上場(m)	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
P1	372.80	52×46	-39.5	
P 2		30×30	-25.9	
P 3		27×27	-14.5	
P 4		45×45	-23.3	
P 5		42×42	-13.4	土器有
P 6	372.79	25×25	-23.3	
P 7		50×50	-26.8	土器有
P 8		33×33	-6.7	
P 9		35×35	-11.8	
P 10	372.80	55×47	-31.8	
P 11		50×42	-32.6	土器有
P 12		50×40	-32.6	
P 13		52×45	-22.1	
P 14		63×51	-26.9	
P 15	372.82	86×62(33)	-34.9	
P 16		72×60	-29.4	
P 17		57×51	-10.7	
P 18-1		50×45	-17.4	
P 18-2		60×45	-25.4	-
P 19		60×58	-24.2	
P 20	372.86	38×33	-21.0	
P 21		40×30	-21.4	
P 22		38×38	-13.8	
P 23		25×25	-15.0	
P 24		44×40	-41.7	
P 25	372.83	33×27	-11.9	
P 26		44×40	-40.5	
P 27		39×34	-18.3	
P 28		54×49	-35.6	
P 29		75×60	-38.0	土器有
P 30		41×23	-9.1	工品品
P 31		57×41	-29.8	
P 32		67×62	-32.0	***************************************
P 33		50×38	-48.1	
P 34		45×42	-14.4	
P 35	372.84	43×33	-7.4	
P 36	3.2.01	21×21	-9.5	
P 37		19×15	-19.5	
P 38		24×19	-19.5 -9.1	

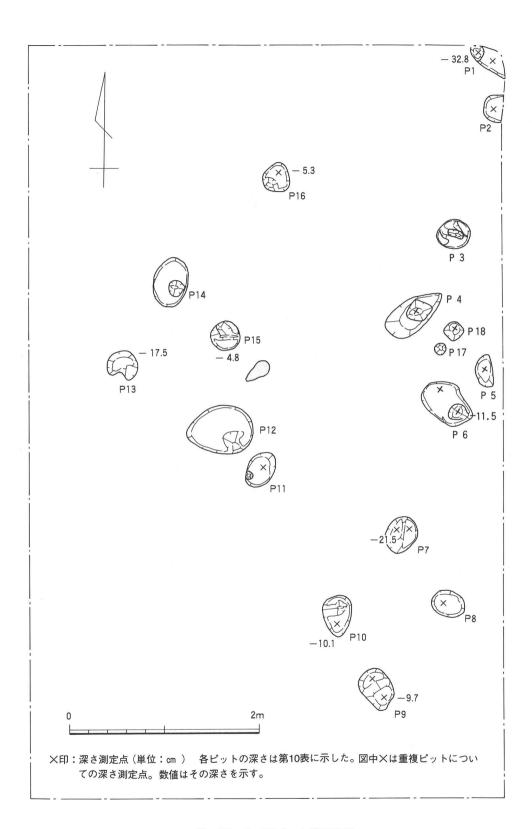
第10表 G-3区ピット一覧表

Pit 番号	上場(m)	長径×短径(cm)	深さ (cm)	備	考
P 1	372.66	?	-25.6		
P 2		30×?	-30.8		
P 3		36×32	-10.3		
P 4		69×33	-41.9		
P 5	372.47	35×18	-14.9		
P 6		58×41	-9.2		
P 7		41×33	-25.4		
P 8		36×26	-20.7		
P 9		46×31	-11.5		
P 10	372.51	45×31	-9.7		
P 11		42×29	-6.8		
P 12		70×52	-14.4		
P 13		33×24	-9.6		
P 14		52×38	-16.5		
P 15	372.43	32×32	-9.1		
P 16		32×30	-9.6		
P 17		12×12	-12.0		
P 18		21×21	-17.2		

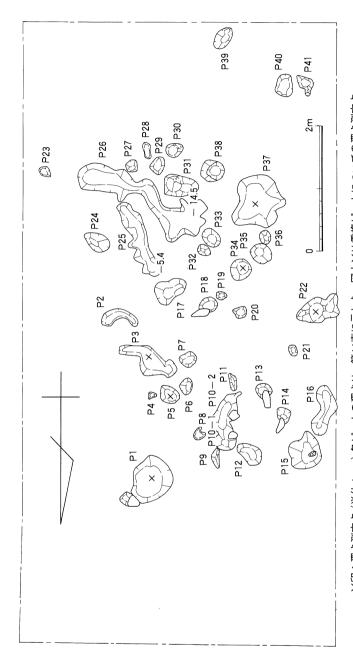
第11表 G-4区ピット一覧表

Pit 番号	上場(m)	長径×短径(cm)	深さ (cm)	備	考
P1	372.39	77×62	-15.1		
P 2		60×20	-4.6		
P 3		96×40	-5.8		
P 4		14×10	-7.1		
P 5	372.31	34×25	-7.9		
P 6		28×20	-6.9		
P 7		27×25	-12.4		
P8		21×16	-4.7		
P 9		32×13	-6.0		
P 10	372.31 372.33	34×??×30	-23.5 -16.0		
P 11		29.12	-5.2		
P 12		45×26	-12.6		
P 13		27×25	-12.1		
P 14		27×22	-10.3		
P 15	372.31	61×54	-22.4		
P 16		80×26	-6.6		
P 17		52×37	-10.1		
P 18		30×25	-11.4		
P 19		17×13	-7.5		
P 20	372.24	22×17	-13.8		
P 21		17×13	-6.8		
P 22		73×40	-16.2		

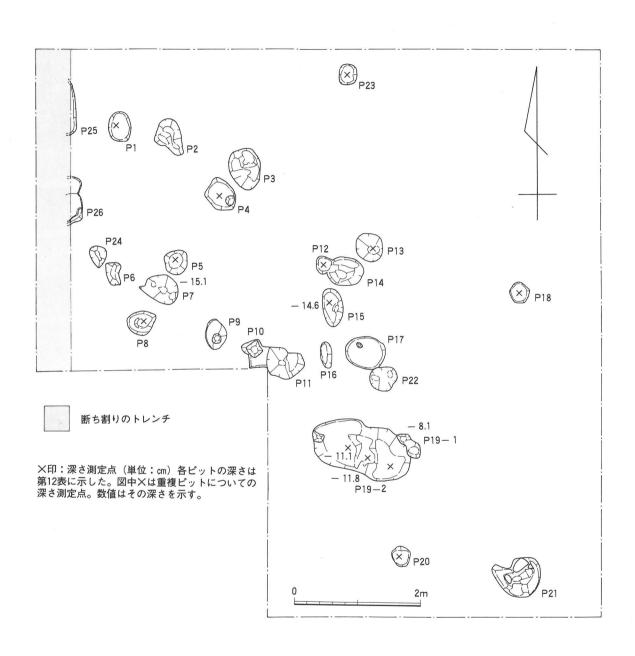
Pit 番号	上場(m)	長径×短径(cm)	深さ (cm)	備考
P 23		22×16	-5.6	
P 24		44×28	-10.8	
P 25	372.31	130×33	-8.1	
P 26		260×45	-11.3	
P 27		21×21	-4.5	
P 28		29×10	-6.9	
P 29		38×23	-4.4	
P 30	372.29	27×22	-10.9	
P 31		54×34	-39.3	
P 32		23×16	-14.5	
P 33		32×24	-11.4	
P 34		36×34	-13.6	
P 35	372.20	37×35	-17.2	
P 36		22×17	-24.6	
P 37		92×80	-18.2	
P 38		39×35	-25.4	
P 39		40×25	-11.4	
P 40	372.25	35×27	-12.5	
P 41		38×20	-12.3	



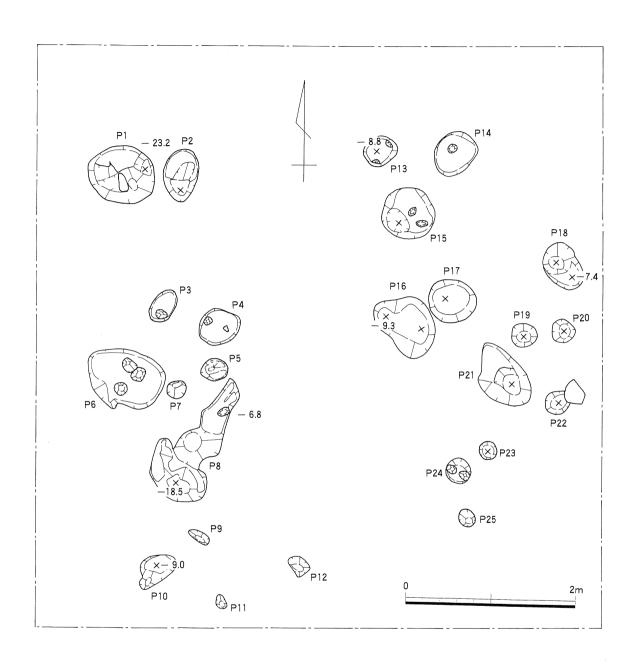
第32図 G-3区ピット群平面図



X印:深さ測定点 (単位:cm) 各ピットの深さは、第11表に示した。図中Xは重複ピットについての深さ測定点。数値はその深さを示す。



第34図 H-4区上面下面ピット群平面図



×印:深さ測定点(単位:cm)各ピットの深さは、第13表に示した。 図中×は、重複ピットについての深さ測定点。数値はその深さを示す。

第35図 H-4区下面ピット群平面図

第12表 H-4区ピット一覧表

	1		I	
Pit 番号	上場(m)	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
P 1	372.11	47×35	-18.4	
P 2		62×43	-12.4	
P 3		66×50	-20.7	
P 4		57×42	-21.2	
P 5		40×40	-20.8	弥生土器片有
P 6	372.01	36×24	-12.4	
P 7		62×45	-20.9	
P 8		47×38	-14.2	
P 9		49×35	-9.2	
P 10	372.17	45×30	-12.5	
P 11		60×45	-22.8	
P 12		30×27	-9.0	
P 13		47×44	-18.9	
P 14		60×45	-24.1	
P 15	372.08	61×32	-3.1	
P 16		42×19	-7.3	
P 17		64×52	-13.4	
P 18		32×32	-6.1	
P 19–1		50×24	-10.5	
P 19-2		163×80	-21.8	
P 20	372.10	35×30	-12.2	
P 21		76×63	-20.2	
P 22		45×40	-22.0	
P 23		35×28	-11.4	
P 24		35×26	-17.4	
P 25	372.11	?	-7.4	
P 26		?	-10.3	

〈H-4区のピット群〉(第34図、第35図)

この区では39個のピットが検出されている。これらは黒褐色土層(II層)中より検出されたもの(上面ピット群、 $PU 1 \sim PU 26$ 、U=Upper の略)と基盤層上面で検出されたもの(下面ピット群、 $PL 1 \sim PL 25$ 、L=Lower の略)に分かれる。上面のピットと下面のピットが重複する例、または、上・下面のピットが重複する例もみられた。

上面ピット群では、 $PU1 \sim PU6$ 、PU24、PU25が径約2m程のサークル状に並び、それぞれの径、深さにあまり大きな相違が認められない点は、注意される。PU2、PU5からは弥生土器が検出されている。

下面のピット群もアトランダムな分布を示しているが、PL1、PL13、PL18、PL24、PL8 等のピットがいずれにしても G-4区と連続するピット群であり、あるいは弥生時代の円形住居 址の柱穴であった可能性も考えられるが、決定的なことはいえない。

〈I-4区のピット群〉(第36図)

個数23のピットを検出している。形状は浅い土拡状のものを除けば円形ないし楕円形を呈す

第13表 H-4区下層ピット一覧表

Pit 番号	上場(m)	長径×短径(cm)	深さ (cm)	備考
P1	372.14	83×70	-37.1	
P 2		64×42	-28.3	
P 3		44×27	-12.9	
P 4		52×45	-11.1	
P 5	372.10	35×27	-7.2	
P 6		95×73	-26.6	
P 7		25×21	-6.9	
P 8		160×83(23)	-20.3	
P 9		27×12	-8.5	
P 10	372.09	53×33	-26.6	
P 11		18×13	-7.6	
P 12		29×18	-5.5	
P 13		40×38	-9.9	
P 14		56×45	-18.1	
P 15	372.13	65×63	-21.5	
P 16		80×73	-14.6	
P 17		57×50	-10.6	
P 18		59×40	-14.5	
P 19		30×30	-17.9	
P 20	372.12	28×28	-17.6	
P 21		88×52	-17.3	
P 22		30×27	-7.1	
P 23		22×22	-5.6	
P 24		30×30	-14.3	
P 25	372.08	22×19	-30.1	

るが、深さ10cm未満のピットも10穴近くあり、全体的な性格は不明とする外はない。ただP5、P8、<math>P20、P22、P23は20cm以上の深さがあり、形状からも柱穴の可能性はある。

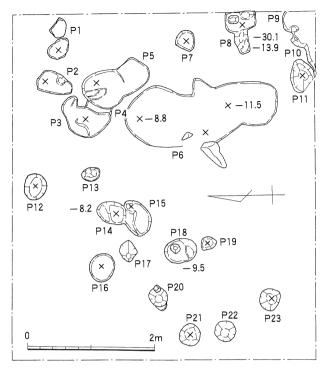
〔出土遺物〕

(縄文土器)(第37図-1~4、PL.24)

1は縄文後期中葉の鉢の口縁部である。口縁に橋状把手をつけ、把手上に入組み状に沈線文を施す。2は晩期の深鉢胴部の破片である。外面はナデの後縦方向にハケ状工具で帯状に施文し、両脇にナナメ方向の沈線を施す。3、4は突帯文土器の深鉢の口縁部である。突帯はヘラ状工具で波状にえぐり、その位置はいずれも端部より少し下がった個所につけられている。縄文晩期後半に位置付けられる。

(弥生土器)(第37図-5~19、第38図-20~23、38、PL.24、25)

 $5\sim 8$ 、38は弥生前期の甕の破片である。5、6、7は外面ハケ調整後くびれ部下方に、5、6は1条、7は3条のヘラ描き沈線をそれぞれ施す。また、6、7、8は口唇部に刻み目をもつが、5は刻み目をもたない。38は外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整を施す。 $9\sim 11$ 、14、15は前期の壺の破片である。いずれも胴の上部。9、10、11はヘラ描き羽状文を施す。9は貝殻で施文した羽



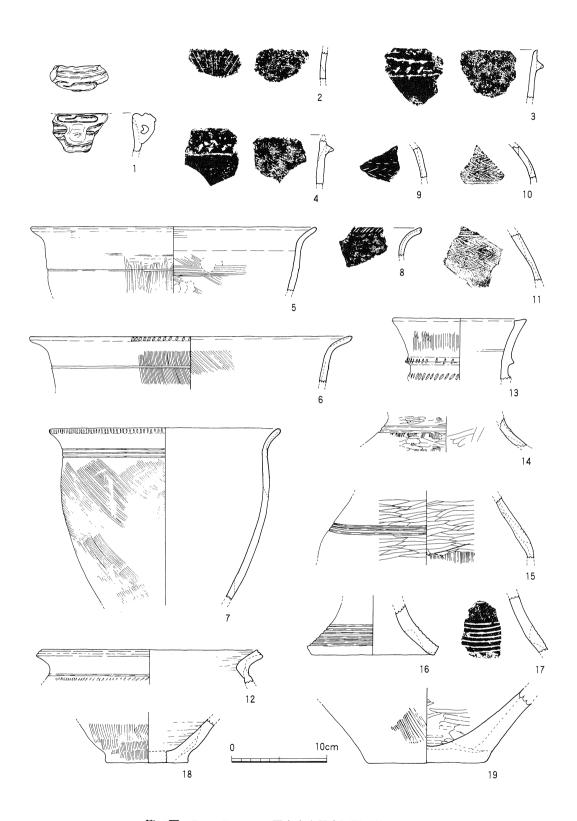
×印:深さ測定点(単位:cm)各ピットの深さは第14表に示した。図中×は重複ピットについての深さ測定点。数値はその深さを示す。

第36図 1-4区ピット群平面図

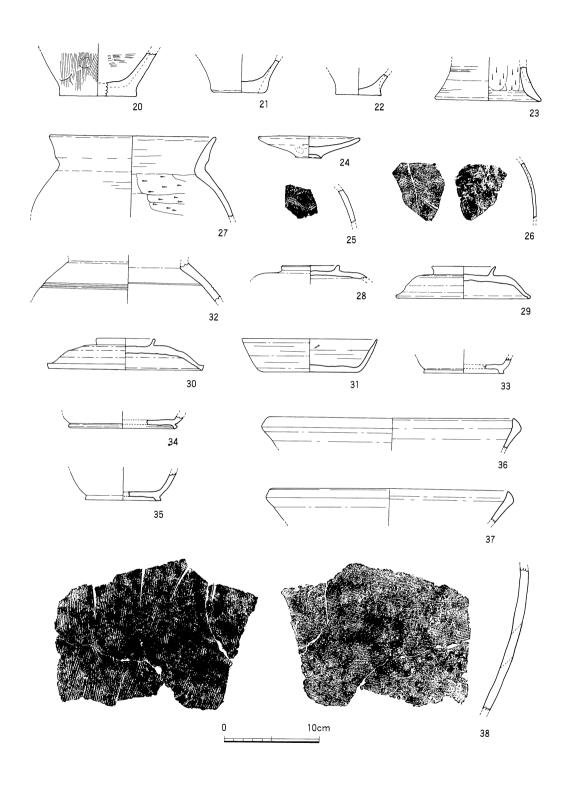
状文と斜格子文の間に、ヘラで施文した平行沈線文を入れ、破線状の刺突文を入れる。10はヘラで施文したと思われる3段の羽状文を施し、その下にヘラ描き平行直線文を施す。11は、ヘラ描き平行線文の下に貝殻で施文した3段の羽状文をもつ。14、15はいずれも内外面をヘラミガキし、外面頚部~胴部にかけて3条のヘラ描き沈線文を施す。12は中期後葉の甕形土器の口縁部である。口縁端部に2条の細い凹線をもち、頚部に1条の沈線、その下に連続刺突文を施す。13は中期の壺の口縁。下方に連続の刻み目をもつ断面三角形の突帯を2条もつ。口縁端部は平らに仕上げ、その下方はタテハケ。16、17は高坏の脚部で裾部に多条のヘラ描き平行沈線を施す。18~22は前・中期の甕の底部。18、19、20は前期のものと思われる。いずれも外面はハケ調整が施され、焼成は良好である。21、22は中期の甕の底部と思われる。調整はいずれもナデで1mm以下の砂粒を含む。22は外面底部にハケメが残る。23は高坏の脚部。外面はヨコナデ調整、内面は端部はヨコナデ、それ以外はヘラケズリを施す。

(土師器)(第38図-24~27、PL.24、25)

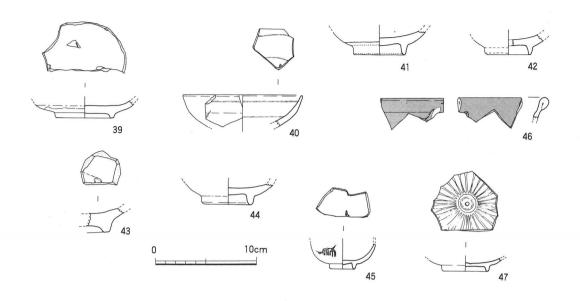
24は古墳時代前期のものと思われる。浅い皿状の坏である。口径は10.4cmで、外面調整はナデ、内面は風化が激しく不明。調整をみると、蓋の可能性もある。25、26は古式土師器の甕である。25は外面に5条からなるゆるい波状文を施す。26は外面に不定方向のハケ調整を施し、内



第37図 F-3、F-4、F-5区出土土器実測図(第15表参照)



第38図 F-3、F-4、F-5区出土土器実測図(第15表参照)



第39図 F-3、F-4、F-5区出土土器・陶磁器実測図(第15表参照)

面はヘラケズリの後ナデている。いずれも焼成は良好。27は退化した二重口縁をもつ甕の口縁~ 上胴部である。調整は外面はナデ、内面は口縁部はナデ、頚部以下はヘラケズリである。

(須恵器)(第38図-28~35、PL.24下、25、26 F)

28、29、30は輪状つまみをもつ坏蓋の蓋の破片である。28、30は天井部が低く、29は天井が高い。いずれも内・外面とも回転ナデで仕上げる。31、33~35は坏身である。33、34、35は高台がつき、高台はいずれも底部の端につく。31は高台がつかないもので、底部はヘラ切り後にナデ調整を施す。32は壺の上胴部である。外面は3条の沈線文を施し、内面は回転ナデで仕上げる。焼成は良好。

(中世須恵器)(第38図-36、37、PL.25)

36、37は東播系の鉢の口縁部である。いずれも逆「く」の字状に屈曲し、肥厚する。調整はいずれも内外面とも回転ナデである。13世紀のものと思われる。

(陶磁器)(第39図-39~47、PL.26中・下)

近世、近代の陶磁器である。39、41~44は唐津系の碗でいずれも江戸後半のものと思われる。39は内面と外面上半に褐白色の釉がかかる。見込みには、胎土目跡が残る。41~44は「木原唐津」と呼ばれる陶胎染付である。41、42、44は高台畳付を除く内外面に施釉されているが、43は外面下半から高台内は施釉されていない。また、43は見込みに胎土目跡が残る。40、45は伊万里系の染付。40は皿で淡緑色の地に淡い藍色の染付が施される。45は坏で淡い白色の地に濃

第14表 1-4区ピット一覧表

Pit 番号	上場(m)	長径×短径(cm)	深さ (cm)	備	考
P 1	372.07	41×28	-6.1		
P 2		58×36	-6.0		
P 3		79×46	-19.0		
P 4		42×12	-2.5		
P 5	372.03	110×61	-11.7		
P 6		244×99	-12.1		
P 7		35×30	-5.4		
P 8		68×50(22)	-16.4		
P 9		?	-14.3		
P 10	372.06	?	-14.0		
P 11		53×37	-23.0		
P 12		42×36	-13.6		
P 13		29×22	-7.7		
P 14		46×35	-14.8		
P 15	372.85	60×41	-13.1		
P 16		45×40	-6.2		
P 17		35×28	-15.6		
P 18		52×38	-14.3		
P 19		25×20	-8.9		
P 20	372.85	38×30	-39.0		
P 21		36×33	-10.6		
P 22		33×33	-25.9		
P 23		35×32	-25.3		

緑色の釉がかかる。46は石見焼の片口鉢の破片。全体に濃緑色の釉がかかる。47は磁器碗の底部。内面見込みには花文を型押しし、青白色の釉がかかる。18世紀のものと思われる。

(老室)

以上、主として第2次調査で検出されたピット群についての検討を加えてみた。要約的にいえば、これらが F 区では南北に、H-4区~I-4区では東西にかなり集中して検出されているので、偶然の結果とは思えず、上記区域に何等かの建築物が存在したであろうことが推定される。

時期的には弥生時代のものと、古代~中世のものが考えられよう。

(久保谷浩二)

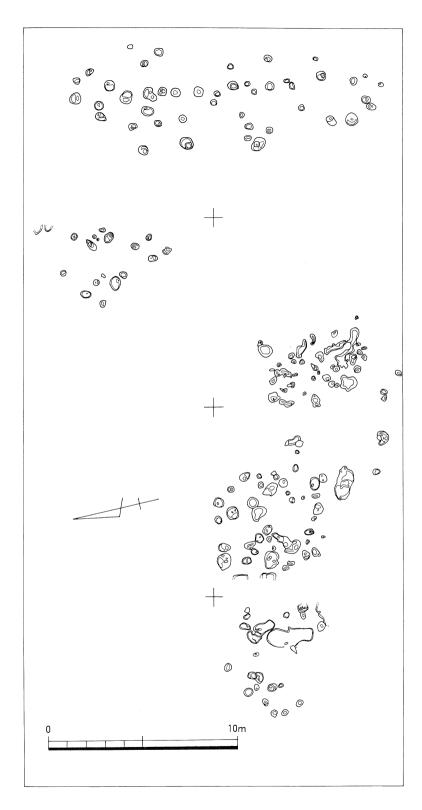
第15表 第2次調査出土土器・陶磁器観察表 (F-3、F-4、F-5区)

יכת	タスタ			P P UAA OC	f観祭衣(F-3、F-4、 	1 - 3 2 2 /	
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
1	PL 24 上段	G-4	縄文鉢 口縁部	不明	外:口縁に橋状把手を 付け、把手上に入組状 に沈線文を施す	①1mm程度の砂粒を多く 含む ②内;淡褐色、外;淡赤 褐色 ③良好	
2	PL.24 上段	G–4·Ⅱ層	縄文深鉢胴部	不明	外:ナデ、縦方向にハ ケ状工具で帯状に施文 し、両脇にナナメ方向 の沈線	①2mm以下の砂粒を多く 含む ②茶褐色 ③良好	
3	PL.24 上段	H ライン	縄文深 鉢口縁 部	口径不明	外:突帯はヘラ状工具 で波状にえぐる、ナデ 内:不明	①0.5~1.5mmの砂粒を多く含む ②茶褐色 ③良好	
4	PL.24 上段	G-4西半分	縄文深 鉢口縁 部	口径不明	外:ナデ、突帯はヘラ 状工具で波状にえぐる 内:ナデ	①0.5~1.5mmの砂粒を多 く含む ②茶褐色 ③良好	
5	PL.24 上段	F-3-4·II 層	弥生 甕 口縁部	口径 29.5 cm	外: 貝 殻 に よる ハケ メ、後 貝 殻 に よる 1条 の 沈線 内: 貝 殻 に よる タテ、 ナナメ 方向 の 沈線	①1~2m程度の砂粒を 含む ②淡茶褐色 ③良好	
6	PL.24 上段	G–4 Ⅱ 層	弥生 甕 口縁部	口径33.5 cm	外: 口縁端部に刻み 目、タテハケ後、1条 のヘラ描き沈線 内: ナナメ方向のハケ メ	①2mm以下の砂粒を多く 含む ②淡黄褐色 ③良好	
7	PL.24 上段	I–3Ⅱ層	弥生甕	口径23.5 cm	外: 口縁端部に刻み 目、3条のヘラ描き沈 線、ナナメ方向のハケ メ 内: ヨコ方向のミガキ 後ナデ	①3mm以下の砂粒を多く 含む(石英) ②淡褐色 ③良好	
8		G-4	弥生甕 口縁部	口径不明	外:口縁に細い刻み 目、ヨコナデ 内:ヨコナデ	①密 ②薄白茶色 ③良好	
9		F-5 (2、3) 包含層	弥生壺 胴部	不明	外:貝殻による斜格子 文、羽状文、ヘラによ る平行直線文、刺突文 内:ヨコ方向のミガキ	①2mm程度の砂粒を含む ②淡茶褐色 ③良好	
10		F-5	弥生壺 胴部	不明	外:ミガキ後羽状文、 ヘラ描き平行直線文 内:ヨコ方向のミガキ	①2mm大の砂粒あり ②淡茶褐色 ③良好	
11		H-4 (2,3) Ⅱ層	弥生壺 胴部	不明	外:ミガキ後へラ描き 平行直線文、貝殻によ る羽状文 内:ヨコ方向のミガキ	①1mm大の砂粒あり ②白黄褐色 ③良好	

1	Ι	Γ	Т	T	T		1
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
12		G-4-1	弥生 甕 口縁部	1	外:口縁端部に2条の 凹線、ヨコナデ後、1 条の沈線、刺突文 内:ヨコ方向のナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②淡黄褐色 ③良好	
13		I-3 · IV層 上面	弥生壺 口縁部		外:刻み目をもつ2条 の突帯、ヨコナデ後タ テハケ 内:ヨコナデ	①1~5mm程度の砂粒を 含む ②淡黄褐色 ③良好	
14		H-4-2 · IV層	弥生壺 頚部~ 胴部	1	外:ヘラミガキ、3条 の沈線 内:ヘラミガキ	①密、1~5mmの 砂 粒 あり ②白黄色 ③良好	
15		H-4・Ⅱ 層 上面	弥生壺 頚部~ 胴部	i	外:ヘラミガキ、3条 の沈線 内:ヘラミガキ	①2mm程度の砂粒を含む ②淡黄茶褐色 ③良好	
16		H-4-23 · SabT	弥生高 坏脚	底径13.0 cm	外:7条の凹線文 内:風化著しく不明	①2m以下の砂粒を含む (石英) ②黄褐色 ③良好	
17		H-4	弥生高 坏脚	不明	外:7条の凹線文、黒 斑あり 内:ナデ	①1mm以下の砂粒を多量 に含む ②淡黄褐色 ③良好	
18		I-3	弥生甕 底部	底径8.5 cm	外:タテハケ 内:風化著しく不明	①3mm程度の砂粒を含む ②淡茶褐色 ③良好	
19		H-4-3	弥生 甕 底部	底径12.0 cm	外:タテハケ 内:ヨコ方向のヘラミ ガキ	①2㎜以下の砂粒を含む ②黄橙色 ③良好	
20		F-3-1	弥生甕 底部	底径8.0 cm	外:タテハケ 内:ヨコハケ後ナデ調 整	①3~5mm程度の砂粒を 含む ②茶褐色 ③良好	
21		(} -4	弥生 甕 底部	底径6.0 cm	外:ナデ (風化著しく 不明) 内:ナデ (風化著しく 不明)	①1mm以下の砂粒を含む ②淡黄褐色 ③良好	残存率底部のみ
22		H'-3	弥生甕 底部	底径4.8 cm	外:ヨコナデ、底面に ハケメ、指頭圧痕 内:ヨコナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②淡黄茶褐色 ③良好	
23		1	弥生高 坏脚部	底径11.0 cm	外:ヨコナデ 内:ケズリ後ナデ	①3㎜以下の砂粒を含む ②赤褐色 ③良好	
24		G-4	土師坏	口径10.4 cm	外:ナデ 内:風化著しく不明	①2mm以下の砂粒を含む (石英、花崗岩の小砂粒) ②灰褐色 ③良好	

14:120		T	T	1			Γ
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)		①胎土②色調③焼成	備考
25		G-5・Ⅱ 層 下部	土 師 壺・ 甕 上胴部	不明	外:ナデ後波状文を施す 内:ヘラケズリか? (風化のため明確でない)	①ほとんど砂粒を含まない②淡黄褐色③良好	
26		F-3	土 師 壺・甕 上胴部	不明	外: 方向が不規則なハ ケ後一部ナデ 内: ヨコ方向のヘラケ ズリの後ナデ	①1m以下の砂粒を少量 含む ②淡黄褐色 ③良好	
27	PL.24 下段	G–4・Ⅱ 層	土師 甕 口縁部	cm	外:退化した二重口 縁、ヨコナデ、風化の ため不明 内:ヨコ方向のヘラケ ズリ	①2mm以下の砂粒を多く 含む ②淡黄褐色 ③良好	
28	PL.24 下段	F - 3. F - 4 (P-29)	須恵器 坏蓋	つまみ径 5.0cm つまみ高 0.6cm	外:回転ナデ内:回転ナデ	①密 ②灰色 ③良好	残存率 約半分
29	PL.24 下 段 PL.26 上段	F-4-4	須恵器 坏・蓋 底部	1	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①砂粒を含む ②暗灰色 ③良好	残存率 1/4以 下
30	PL.24 下段	F-3	須恵器 坏蓋底 部	つまみ径 6.0 cm つ ま み 高 0.7 cm 器 高3.4cm	外:回転ナデ、風化し ている 内:回転ナデ	①1mm大の砂粒を多く含む ②内;灰色、外;白灰色 ③良好	残存率 1/3
31	PL.24 下段	F-4	須恵器 坏身	口径14.0 cm 底径10.0 cm	外:ナデ、底部ヘラギ リ調整 内:回転ナデ	①密 ②白灰色 ③不良	
32		F-5-2·3 I 層	須恵器 壺頚~ 胴部	不明	外:3条の沈線、あら い回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②暗灰色 ③良好	
33	PL.24 下段	F-4-2 (旧調査区 埋土)	須恵器 坏身底 部	底径13.2 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②暗灰色 ③良好	
34		F-5-2·IV 層上面	須恵器 坏身底 部	底径8.4 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②暗灰色 ③良好	
35	PL.24 下段	F-5 · EW -T	須恵器 坏身底 部	底径8.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②暗灰色 ③良好	

挿図	.]						T
番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
36	PL.24 下段	G-4-3 · 4	須恵質 鉢 口縁部	口径30.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①1~5mmの砂粒を含む ②暗灰色 ③良好	東播系
37	PL.24 下段	I-3	須恵質 鉢 口縁部	口径31.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①や や 密、1~5mmの 砂 粒を含む ②暗灰色 ③良好	東播系
38		I-4-1	弥生甕 下胴部	不明	外:タテ方向のハケメ 内:ヨコ方向のハケメ	①5㎜以下の砂粒を含む ②暗橙色 ③良好	
39	PL.26 中段	G-4·IV層 上面 930325	陶磁器碗底部	高台径 5.8cm	胎土目跡が残る	①密 ②薄茶色 ③良好	唐津系 江戸後 半
40	PL.26 中段	F-5-2·床 土上面 930330	陶磁器皿	口径11.8 cm	外:染付、内:染付	①密 ②薄緑色 ③良好	伊万里
41	PL.26 中段	G-4 930325	陶磁器 碗底部	高台径 5.2cm	外:染付、施釉 内:施釉、高台畳付は 釉がかからない	①密 ②釉;薄灰色、染付;薄 藍色 ③良好	唐津系 江戸後 半
42	PL.26 中段	G-4 930325	陶磁器 碗底部	高台径 4.8cm	外:施釉 内:施釉、高台畳付は 釉がかからない	①密 ②素地;赤褐色、釉;濃 緑色 ③良好	唐津系 江戸後 半
43	PL.26 中段	G-4 930325	陶磁器 碗底部	底径不明	外:施釉 内:施釉、目跡が残る	①密 ②素地;白茶色、釉;緑 色 ③良好	唐津系 江戸後 半
44	PL.26 中段	G-4·IV層 上面 930325	陶磁器 碗底部	高台径 5.0cm	外:染付、施釉 内:施釉、高台畳付は 釉がかからない	①良 ②茶褐色、釉;青灰色、 染付;濁藍色 ③良好	唐津系 江戸後 半
45	PL.26 中段	H-3·IV層 上面 930420	陶磁器 碗底部	高台径 2.6 cm	外:染付 内:染付	①密 ②白色,染付;藍色 ③良好	石見系 江戸後 半
46	PL.26 中段	H-4-3· IV層 930405	陶磁器 片口鉢 口縁注口	口径不明	玉縁をもつ、外:施釉 内:施釉	①密 ②釉;濃緑色 ③良好	石見焼
47		H-3-1 · N層上面	陶磁器 碗底部	高台径 5.0cm	外:施釉 内:施釉	①密 ②釉;青白色 ③良好	18 c



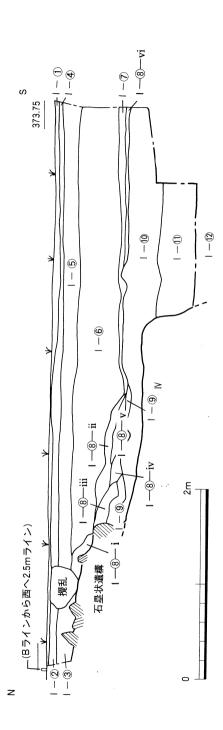
第40図 F区~I区ピット群分布図



第41図 B-2区東拡張区(B-1区)石塁状遺構実測図

(6)石塁状遺構(第41~42図、折り込み別図、PL.11下、17下、18) 【検出状態】

この遺構は第1次調査、補足調査、第2次調査において A-1区、B-1区、C-1区、D-1区、F-5区、G-5区、G-6区で検出されている。遺構の存在が判明したのは、1-b 号住居址の南辺調査の際に東西に列状をなしている、石組みの北縁が発見されたことによる。その後 C-1区にもやや様相を異にする石組みの存在が確認され、続いて D-1区でも同様の遺構が検出されたのであった。その後、F-5区、G-5区において、遺構の延長部の所在を追及したところ当該区において、変形してはいるが連続部分を検出することができた。石組み構造は、検出個所において相違がみられるので、以下発掘区ごとに概観して後に総括所見を加えることとする。



第42図 B-2区、二小区~南拡張区 NSB 東壁断面図

〔構造〕

<B-1区>(PL.11下)

遺構のほぼ全体を検出している。保存状態が比較的良好で、構造の全様を観察することができる。形状は断面が富士山形を呈し、頂部は平坦になっている。北側裾はレベルが高く、斜面距離も短い。南北裾間の距離、つまり石塁の巾は約2.2 m, 南側の裾端部から最頂部までの高さは約0.6 m である。石組みの状況についてみると、大小の川原石を用いて下方から漸次積み上げているようで、裾端部に最大径0.7×0.4 m 程度の大型の石を配している。また斜面の中間位置にも比較的大型の石を積んでいるが、こうした用法は石塁の崩落を防止するためにとられた措置と考えられる。

石組みは、台地南縁の崖面をあたかも被覆するように積まれており、石塁状遺構が構築された 目的の一端を伺うことができる。

遺構の南側は厚い泥土が埋っている湿地帯になっている。そしてこの石塁に平行する列石が泥湿帯を介して B-1区南端で検出されているが、対岸の石組みの可能性がある。泥湿帯は台地南縁に形成された小流もしくは、人工池跡とも考えられた。

石塁状遺構は、東にほぼ直線的に国道186号線付近にまで延びているが、その先端は確認できない。

<C-1区=F-5、F-6区>(PL.17下、18上)

この区での検出状況をいま一度確認すると、台地南縁の崖面をシルト状の粘質土を被せ、それに栗石とやや大型の川原石をあたかも貼り付けたような石組みとして検出されている。遺構の高さは約 $0.5\,\mathrm{m}$ 、巾は、 $0.8\sim1.2\,\mathrm{m}$ 程度で、積み上げ傾斜角は40度前後。B-1区では富士山形の傾斜をなしていたが、この区の場合はそれよりも急になっている。遺構の前方には灰褐色の砂礫層が広がっていて、この状況もB-1区とは異なる。

このように石組み状況、石塁構造などが B-1区と異なるので、別個の遺構の可能性がなくもない。しかし C 区以西は後世の耕地造成によって大巾に変形されているから、C-1区の石塁も本来の形状が大きく損なわれているかも知れない。

<D-1区=G-6区>

C-1区の石塁状遺構の延長部を求めて検出しえた遺構であるが、遺存状態は比較的良好である。測定しえた巾は約 $1.5\,\mathrm{m}$ 、高さは約 $0.5\sim0.6\,\mathrm{m}$ 。石組みの状況をみると栗石を大量に積み重ね、処々にやや大型の川原石を配して構築している。断面は、縁辺が巾 $0.6\,\mathrm{m}$,高さ $0.2\,\mathrm{m}$ 程度の堤防状の凸をなし、その裏側は台地面に向かって次第に高くなっている。B-1区の断面と比べるとやはり全体に平坦で、山状を呈していないことが知られる。

本来は、断面が富士山形に構築されていたものが後世に削平されたか、洪水等で上部が流出したかで変形したとも考えられよう。

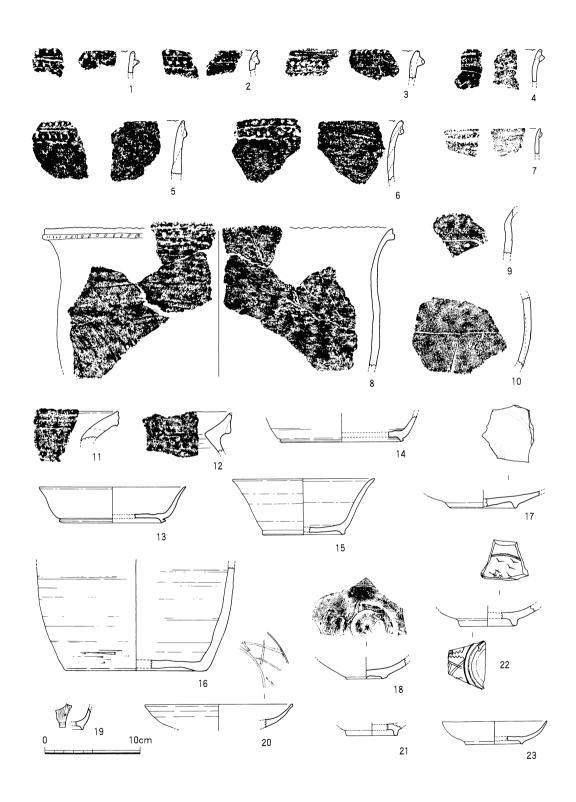
<G-6区>(PL.18)

D-1区の遺構の延長部を求めて検出された石塁状遺構である。栗石大の川原石は、巾約3 m に わたって分布しているが、規模は D-1区とほぼ同様と考えられる。おそらく D-1区よりも後世 の損壊が激しかったためにこのように積み石が散乱したものと考えられる。この区では、遺構の 両側裾に、石塁に直交する方向に打ち込まれた杭列が検出されている。石塁にともなう杭列とみて差し支えないと思われる。

〔出土遺物〕

<F-5・F-6区、G-5・G-6区関係>(第43図、PL.27)

石塁状遺構の調査は第1次、補足、第2次の各調査期間で行っている。またピット群の調査は 第2次調査において実施している。このような事情を踏まえ、出土遺物については一括して説明



第43図 F-5・6区、G-5・6区出土土器・陶磁器実測図(第16表参照)

第16表 第2次調査出土土器 · 陶磁器観察表 (F-5 · 6区 、G-5 · 6区)

			T	I	T	T T	
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)			備考
1	PL.27	F-6	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁刻み目、口縁 下刻み目突帯(V字)、 条痕(?) 内:ナデ	①1~3mm程度の砂粒を 含む ②白褐色 ③良好	
2	PL.27	F-6	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁刻み目、口縁 下刻み目突帯、ナデ 内:ナデ	①0.5~2mmの粗砂粒を含む ②黒褐色、表面突帯部下;茶褐色 ③良好	
3	PL.27	F-6	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁刻み目、口縁 下刻み目(D 字) 突帯、 二枚貝条痕 内:ナデ	①1~3mm程度の砂粒を 含む ②白褐色 ③良好	
4	PL.27	F-6	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁刻み目、口縁 下突帯、ナデ 内:ナデ	①3mm程度の砂粒を含む ②白褐色 ③良好	
5	PL.27	G−6・Ⅲ層	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁刻み目、口縁 下刻み目(D字) 突帯、 ナデ 内:ナデ	①3mm程度の砂粒を含む ②暗灰褐色 ③良好	
6	PL.27	F-6	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁刻み目、口縁 下刻み目(D字) 突帯、 ナデ 内:ナデ	①0.5~2mm程度の砂粒を 含む ②暗褐色 ③良好	
7	PL.27	G-6	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁端部欠損、口 縁下刻み目突帯、ナデ 内:ナデ	①0.5~3mm程度の砂粒を 含む ②濃茶褐色 ③良好	
8	PL.27	F–6・Ⅲ層	縄文 深鉢 口縁部	口径36.0 cm	外:口縁端部欠損、口 縁下刻み目突帯、太い 条痕 内:ナデ	①1~3mmの砂粒を多く 含む ②暗褐色 ③良好	
9	PL.27	F-5	弥生甕 口縁部	不明	外:刺突文の上に 1 条 の沈線、ハケメ 内:ナデ	①2mm大の砂粒を少量含 む ②淡黄茶褐色 ③良好	
10	PL.27	G−6・Ⅲ層	弥生鉢 上胴部	不明	外:ヨコハケ、 1 条の 沈線 内:ヨコハケ	①5mm大の砂粒を多く含 む ②黒茶色 ③良好	
11	PL.27	G–6・Ⅲ層	弥生壺 口縁部	口径不明	外:口縁端部に2条の 凹線文、4条の沈線、 ヨコナデ 内:風化著しく不明 (ナデ?)	①5~3㎜の砂粒を多く 含む ②淡黄褐色 ③良好	

挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
12	PL.27	G-6·石塁 中	弥生 甕 か壺 口縁部	口径不明	外:ヨコナデ 内:頸部以下ケズリ	①2m以下の砂粒を含む ②黄橙色 ③良好	
13	PL.27	G-6·石塁 中	須恵器坏	口径15.0 cm,底径 10.2cm 器高 3.9cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②暗灰色 ③良好	残存率 1/4以 下
14	PL.27	G-6	須恵器 坏	底径12.4 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密、1mm大の砂粒あり ②白灰色、表面一部黒灰 色 ③良好	
15	PL.27	G-5~6· 床土上面· 石塁中	須恵器 坏	底径8.8 cm, 器高 5.9cm	外:回転ナデ、回転糸 切り 内:回転ナデ	①1mm大の砂粒を含む ②内;薄灰色、外;灰色 ③良好	G-5、 G-6出 土破片 が接合
16	PL.28 下段	D-4·I層 F-3, G- 6·I層	須恵質 壺胴下 部 ~底部	底径15.0 cm	右回転にロクロが回る。粘土を縄状にまいて制作したとみられる。底部の調整の仕方が荒い。 (縄状粘土のあとが残る)	①1~5㎜の砂粒を含む ②黒灰色、胎土;赤色 ③良好	1 次 2 次出土 土器片 が接合
17	PL.28 上·中 段	G-5	陶磁器皿	高台径 6.4cm	外:施釉 内:染付,施釉	①密 ②灰白色、染付;青緑色 ③良好	17 c 肥前系
18	PL.28 上·中 段	G-6·石塁 中	陶磁器皿	高台径 4.2cm	外:施釉(上半にかか る) 内:施釉	①密 ②素地;薄茶褐色、釉; 灰白色 ③良好	17 c 唐津
19		G-5	陶磁器 酒坏	不明	外:染付	①密 ②白色、染付;藍色 ③良好	伊万里系
20	PL.28 上·中 段	G-5	陶磁器皿	口径 15.6 cm	内:染付、見込みの釉かきとる	①密 ②灰色がかった白色、染付;淡水色 ③良好	伊万里系
21	PL.28 上·中 段	G-6·石塁 中	陶磁器 不明	高台径 5.4cm	内:施釉	①密 ②素地;薄茶褐色、釉; 灰褐色 ③良好	
22	PL.28 上·中 段	G-6 · I 層	陶磁器 碗	高台径 5.8cm (推 定)	外:染付 内:染付	①密 ②白色 ③良好	伊万里系

挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
23		G–6·I 層	陶磁器皿	口径10.5 cm(推定) 高 台 径 6.0cm(推 定)	外:施釉 内:施釉	①密 ②白色 ③良好	

することにした。以下調査区ごとに解説する。

(縄文土器)(第43図-1~8、PL.27、28)

第43図に示した $F-5 \cdot F-6$ 区、 $G-5 \cdot G-6$ 区出土土器・陶磁器は第2次調査において石塁状遺構中もしくはその近辺で得られたものである。

 $1\sim8$ は晩期の突帯文土器である。いずれも刻み目(6は「D」字状)を施し、断面は「V」字状を呈している。口縁端部にも刻みが施される。突帯が貼り付けられる位置については5、7、8のように端部近くのもの、2、3、4のように5mm程度下方のもの、1cm上下方のものの別がある。

端部直下に突帯を付す例は、端部面と突帯上位面が連続して断面が下垂状を呈している。大型破片の8でみる限りでは、突帯は1条のみである。器面調整はナデ仕上げが多く、3、8など条痕を残すものもある。器種は深鉢と思われる。

(弥生土器)(第43図-9~12、PL.27)

9は前期甕の口縁部である。端部が欠失しているが、ゆるく外反する短い口縁であろう。口縁下に1条のヘラ描き沈線を入れ、その下方に連続刺突文が施されている。口縁部はヨコナデ、胴部はハケ仕上げと思われる。10も前期の鉢の口縁部~胴上部と考えられる。ハケ調整でヘラ描き沈線を1条入れている。

11は大型壺の口縁部。端部には2条以上の凹線が認められる。12は口縁端部が巾広くなった甕である。頚部が「く」字状に屈折する。11、12は中期後半の土器とみられる。

(須恵器)(第43図-13~15、PL.27)

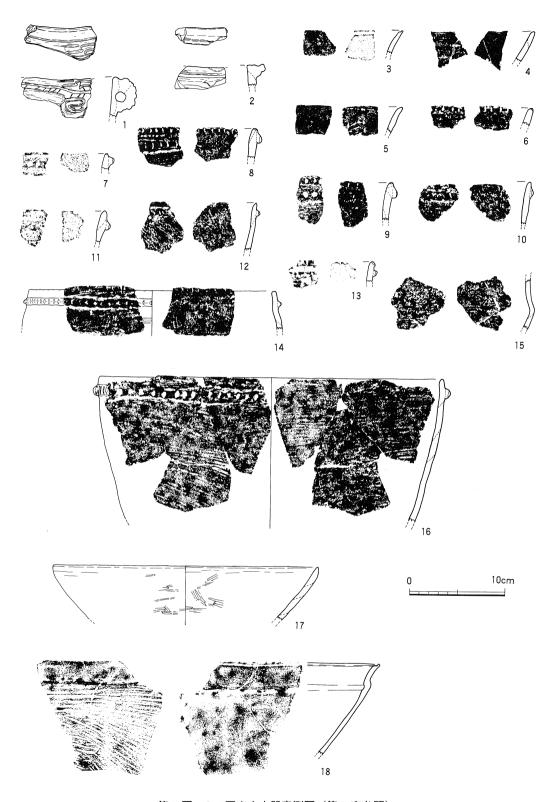
13~15は須恵器の高台を有する坏である。13は低い体部がゆるく湾曲しながら外反している。 身と高台の境界にヘラ先が深く切り込まれているのが注意される。15は高い体部が直線的に上 方に延びているが、先端近くでわずかに外反している。13~15とも高台は削り出されたもので、 底部外縁に造り出されている点が特徴と思われる。

(須恵質土器)(第43図-16、PL.28下)

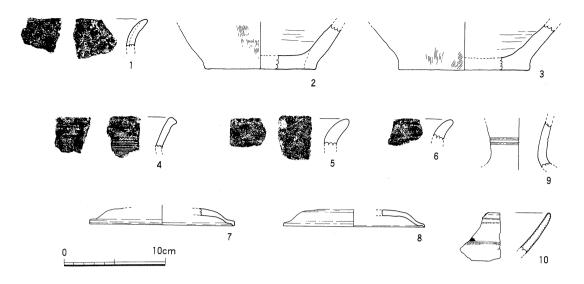
16は11世紀後半~12世紀前半にかけての朝鮮半島系の須恵質土器と思われる。壺の胴下部から底部にかけてのものであり、右方向に粘土ひもを巻き上げてつくったものと思われる。黒灰色を呈し、焼成は良好である。

(陶磁器)(第43図-17~23,PL.28)

 $F-5 \cdot F-6 \boxtimes G-5 \cdot G-6 \boxtimes C$ における陶磁器は、ほとんどが近世・近代の肥前系のものである。



第44図 C-1区出土土器実測図(第17表参照)



第45図 C-1区出土土器・陶磁器実測図 (第18表参照)

17は陶胎染付の皿である。見込みには青緑色の文様が描かれている。内外面とも施釉されているが、高台畳付にはかからない。17世紀後半に位置付けられる。18は唐津系の皿。高台を浅く削り出す。釉は内面と外面上半にかかる。17世紀前半に位置付けられる。21は唐津系陶器で器種は不明。内面に灰褐色の釉がかかる。胎土は密で、焼成は良好。19、20、22は伊万里系磁器片で、19は坏、20は皿、22は碗と思われる。23は磁器の皿である。内・外面に白色の釉がかかる。

〈C-1区関係〉(第44図、第45図、PL.23)

(縄文土器)(第44図-1~18、PL.23)

1、2は後期縁帯文土器の口縁部片である。1は縁帯部には太い沈線間をヘナタリによる疑似縄文を施す。断面半月状の孔は円形を呈する。2は「L」字形に突出させた縁帯文面に凹線による「己」字状の線文がみられる。

 $3\sim5$ 、17は内外面をミガキ仕上げした鉢の口縁部。その中4、17は精製浅鉢と思われる。 $6\sim16$ は晩期の深鉢の口縁部と口縁~胴部の破片である。7、8、 $9\sim14$ 、16は突帯文土器で、突帯を巡らす位置によって3類に分かつことができる。

すなわち7、8のように口縁端部の直下に突帯を巡らすもの、11~14、16のように端部下1cm程度の個所に巡らすもの、8、9のように端部の面と突帯面を連続させるようにして巡らしているものの三者である。突帯にはいずれも刻み目が施されているが、9の刻み目は「D」字状をなしている。また10~12以外は口縁端部にも刻み目が施されている。18は大型の浅鉢で外面は口縁~頚部はヘラミガキ、胴部に横斜走する巾広い貝殻条痕がみられる。内面は端部に細い段状の沈線を切り込み、以下はミガキ仕上げになっている。

(弥生土器)(第45図-1~3)

第17表 第2次調査出土土器・陶磁器観察表 (C-1区・その1)

挿図					観象衣 (U-1区・で		
番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
1	PL.23	C-1·拡張 区	縄文鉢 口縁部		外:帯文の部分には沈 線、擬似縄文(ヘナタ リ)が施されている 内:ヨコ方向のナデ	①2mm以下の砂粒を多量 に含む ②褐色 ③良好	
2		C-1·拡張 区	縄文鉢 口縁部	口径不明	外:縁帯に己状の凹線、風化著しく不明内:ヨコ方向のナデ, 風化著しく不明	①2mm以下の砂粒を含む ②茶褐色 ③良好	
3		C-1·拡張 区Ⅱ-③層	縄文 深鉢 口縁部	口径30.0 cm	外;ナデまたはミガキ 内;ナデまたはミガキ	①0.5㎜の白色砂粒及び 金雲母を含む ②茶褐色 ③良好	
4		C-1·拡張 区Ⅱ-③層	縄文精 製深鉢 口縁部	口径 32.0 cm	外:ケズリまたは条痕 の後ミガキ 内:ミガキ	①1mm以下の砂粒を多量 に含む ②暗灰褐色 ③良好	
5		C-1 · 拡張 区Ⅱ層	縄文鉢 口縁部	口径18.0 cm	外:ミガキ 内:ナデまたはミガキ	①1~2mm程度の砂粒を含む ②灰褐色 ③良好、赤色顔料わずかに付着か?	
6		C-1·拡張 区Ⅱ層	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口唇部に刻み目、 ナデ 内:ナデ	①3m以下の砂粒を含む ②淡灰褐色 ③良好	
7		C-1右列下	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁下刻み目突帯 文、口唇欠ける 内:斜め方向のナデ	①1~3m程度の砂粒を 含む ②褐色 ③良好	
8	PL.23	C-1·拡張 区Ⅱ層	縄文 深鉢 口縁部	口径36.0 cm	外:口縁刻み目、口縁 下刻み目(D字) 突帯 文、ナデ 内:ナデ	①0.5~3mmの砂粒を多量 に含む ②灰黒茶褐色 ③良好	
9		C-1·拡張 区Ⅱ層	縄文 深鉢 口縁部	口径不明	外:口縁刻み目、口縁 下刻み目(D字) 突帯 文、ナデ 内:ナデ	①2mm以下の砂粒を多量 に含む ②淡茶褐色 ③良好	
10		C-1 · 拡張 区Ⅱ層	縄文 深鉢 口縁部	口径 24.0 cm	外:ナデ、口縁下刻み 目突帯文、口唇一部欠 ける 内:ヨコナデ	①0.5~2mm程度の砂粒を 多量に含む ②灰褐色 ③やや不良	
11		C-1·拡張 区Ⅱ-③層	縄文 深鉢 口縁部	不明	外:ナデ、口縁下刻み 目突帯文 内:ヨコナデ	①2㎜以下の砂粒を含む ②淡褐色 ③良好	

挿図		4					
番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
12		C-1 · 拡張 区Ⅱ層	縄文 深鉢 口縁部	口径26.0 cm	外:ナデ、条痕、口縁 下刻み目(D字) 突帯 文 内:ナデ	①0.5~2mm程度の砂粒を 多量に含む ②黒茶褐色 ③良	
13		C-1	縄文 深鉢 口縁部	不明	外:ナデ、口唇外側に 肥厚し上端に刻み目、 口縁下刻み目突帯 内:ナデ	①1~4m程度の砂粒を 含む ②薄褐色 ③良好	
14	PL.23	C-1·拡張 区	縄文 深鉢 口縁部	口径36.0 cm	外:削痕、ナデ、口唇 刻み目、口縁下刻み目 突帯文 内:ナデ	①0.5~3mm程度の砂粒を 多量に含む ②灰黒茶褐色 ③良好	
15	PL.23	C-1・拡張 区暗黒灰色 シルト	縄文鉢 胴部	不明	外:貝殻条痕後ナデ 内:ナデ	①2mm以下の砂粒を多く 含む ②内;黒灰色、外;淡茶 褐色 ③良好	
16	PL.23	C-1·拡張 区最下部砂 層上面	縄文深 鉢口縁 ~胴部	口径36.0 cm	外:擦痕のちナデ、口 縁下刻み目(D字) 突 帯文 内:貝殻条痕後ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②茶褐色 ③良好	
17	PL.23	C-1 ·拡張 区Ⅱ-③層	縄文 浅鉢 口縁部	口径28.0 cm	外:ミガキ 内:ミガキ	①2mm以下の砂粒を多く 含む ②内;淡灰褐色、外;暗 黄褐色 ③良好	
18	PL.23	C-1·拡張 区最下部砂 層	縄文深 鉢口縁 ~胴部	口径36.0 cm	外:口縁〜頸部へラミガキ、胴部貝殻条痕内:口縁段状沈線,以下ヘラミガキ	①1m以下の砂粒と金雲 母を含む ②内;暗灰褐色、外;暗 灰褐色 ③良好	

1は前期の大型壷の口縁部。小片のため整形上の特徴は捉えられない。2、3は同じく前期の甕の底部である。

(土師器)(第45図-4~6)

4は古式土師器の甕・壷の口縁部かと思われる。5、6は大型の甕の口縁部で、奈良時代前後の ものかとみられるが詳言できない。

(須恵器)(第45図-7~9)

7、8は蓋坏の坏片で、いずれも輪状つまみをもつものと考えられる。内面天井部が低い類である。9は長頸壷の頚部と思われる。2条の浅い平行直線文が巡らされている。

(陶磁器)(第45図-10)

近世の陶胎染付碗の口縁部である。淡灰色の器体に藍色の染付を施す。口縁下部に二条の線が

第18表 第2次調査出土土器・陶磁器観察表 (C-1区・その2)

	 					
挿図 番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
1	C-1 · 拡張 区Ⅳ層	弥生壺 口縁部	口径30.0 cm	外:ヨコナデ、胴部タ テハケ 内:ナデ	①1~2m程度の砂粒を 含む ②淡黄白色 ③良好	
2	C-1·拡張 区暗黒灰色 砂質粘土層	弥生 甕 底部	底径11.0 cm	外:タテ方向のハケ 内:ナデ	①2㎜以下の砂粒を含む ②茶褐色 ③良好	
3	C-1・拡張 区暗黒灰色 シルト礫赤 褐色粒を含 む層	弥生 甕 底部	底径13.0 cm	外:タテ〜ナナメ方向 のハケ 内:ナデ	①や や 粗、1~3mm前 後 の白色砂粒を多く含む ②内;淡白黄褐色、外; 黄茶褐色 ③良好	
4	C-1·拡張 区崩土	土師甕 口縁部	口径不明	外:ナデ後ハケ 内:ナデ後凹線文	①微砂粒を含む②黄灰褐色③良好	
5	C-1·拡張 区V層	土師甕 口縁部	口径不明	外:ナデ 内:ナデ	①0.5㎜前後の石英を含む ②灰白黄褐色 ③良好	·
6	В–2ⅢⅡ層	土師甕 口縁部	底径 5.0 cm	外:ナデ 内:ナデ後ヘラ状工具 によるミガキ	①0.5~2m程度の白色砂 粒を含む ②内;淡黒灰褐色、外; 明白黄色 ③良好	
7	C-1·拡張 区V層上面	須恵器 坏・蓋		外:回転ナデ 内:回転ナデ	①白色微砂粒を含む ②明灰色 ③良好	
8	C-1・拡張 区西北コー ナー付近崩 土	須恵器 坏・蓋	口径 14.0 cm	外:回転ヘラケズリ、 ロクロの回転方向は右 内:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を少量 含む ②灰色 ③良好	
9	C-1 · 拡張 区Ⅳ層	須恵器 壺頸部	不明	外:2条の沈線、回転 ナデ 内:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を少量 含む ②灰色 ③良好	
10	C-1 · 拡張 区崩土	陶磁器 碗 口縁部	口径16.0 cm	外:染付、施釉 内:施釉	①密 ②淡灰色、染付;藍色 ③良好	

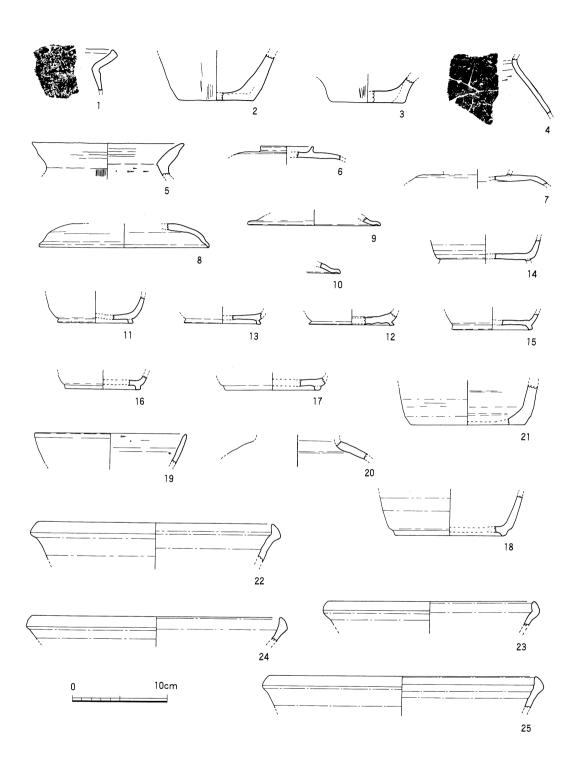
巡り、胴部の文様は小片のため不明。

〈D-1区〉(第46図-1~25)

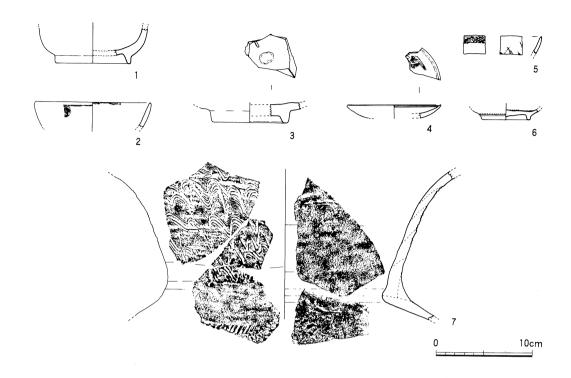
(弥生土器)(第46図-2、3)

器種、部位が判明したのは、2の甕底部と3の壷底部であった。2は前期に属すると思われる。

(土師器)(第46図-1、4、5)



第46図 D-1区・その他区出土土器実測図(第19表参照)



第47図 B-3区、C-5区、D-1区出土土器・陶磁器実測図(第20表参照)

1は甕の口縁~頚部片である。口縁端部が内側にわずかに突出することと、頚部が「く」字状に屈折することが特徴的である。4は甕の上胴部片でハケによる仕上げ。板状の工具による多条の平行細線が認められる。5は頚部が「く」字状に屈折するが、口縁部の器壁が厚い。

(須恵器)(第46図-6~21、第47図-7)

 $6\sim10$ は蓋坏の蓋の破片である。いずれも輪状つまみをもつと推定されるが、6の輪部はつまみ出しによるものである。内面天井部はいずれも低い。 $11\sim17$ は坏底部片である。低い高台を底部外縁近くに設けている。体部については11のようにやや湾曲気味に立ち上がるものや、18のように直線的に外傾するものの別が認められる。19は坏の口縁部で、底部には17のような高台が付くとみられる。20は壷の肩部片。21は壷の底部片。

第47図-7は大型の甕の口縁〜頚部の破片である。淡灰色を呈し、胎土に大粒の砂を含む。粗い造りの須恵器で、頚部には太くて粗い複線波状文が採取されており、また七渡瀬 I 遺跡出土の土器群中に同一個体らしき破片が散見されている。

(中世須恵器)(第46図-22~25)

22~25は東播系須恵器の鉢である。口縁部は逆「く」の字状に肥厚しながら屈曲する。いずれも焼成は良好。

第19表 補足調査出土土器・陶磁器観察表 (D-1区・その他)

	1042 11				THE CO		
挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
1		D-1 · 東拡 張区Ⅲ層	土師甕 口縁部	口径不明	外:ナデ 内:ナデ	①1~2mmの砂粒を多く 含む ②橙茶褐色 ③良好	
2		D-1・東拡 張区Ⅳ層	弥生甕 底部	底径8.0 cm	外:風化著しく不明 内:ナデ	①2~4mm前後の砂粒を 含む ②内;淡灰褐色、外;灰 褐色、一部茶褐色 ③やや悪	
3		D-1 · 東拡 張区Ⅳ層	弥生壺 底部	底径8.0 cm	外:ナデ後タテハケ 内:ナデ(風化著しく 不明)	①2m前後の砂粒を含む ②内;明 黄 白 褐 色,外 底;黄白褐色,その他; 明黄橙褐色 ③やや悪	
4		B -4 −イ・ Ⅱ層	土師甕 上胴部	不明	外:8条のくし描き平 行沈線文、ヨコナデ 内:ヨコ方向のヘラケ ズリ	①1mm程度の砂粒を含む ②淡黄白褐色 ③良好	
5		D−1 ・東拡 張区 V 層	土師甕 口縁部	口径 16.0 cm	外:ヨコナデ、タテハケ 内:ヨコナデ、ヨコ方 向のケズリ	①雲母を多量に含む ②淡灰黄褐色 ③良好	
6		D-1 ·東拡 張区 V 層	須恵器 坏・蓋 天上部	つまみ径 5.5 cm	外:回転ケズリ 内:回転ナデ	①密、白色微砂粒を含む ②灰色 ③良好	
7		D-1 · 東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏・蓋	口径不明	外:ナデ 内:ナデ	①0.5mm程度の白色砂粒 を含む ②内;白灰褐色 外;淡灰褐色 ③良好	
8		D-1 · 東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏・蓋	口径 16.0 cm	外:ナデ 内:ナデ	①密 ②明灰白色 ③良好	
9		D−1 ・東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏・蓋 口縁部	口径 14.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②灰色 ③良好	
10		D-1・東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏・蓋 口縁部	口径不明	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密、微砂粒を含む ②灰色 ③良好	
11		D-1 · 東拡 張区Ⅲ層	須恵器 坏底部	底径8.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②灰茶褐色 ③良好	
12		D-1 · 東拡 張区 I 層	須恵器 坏底部	底径9.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①1mmの砂粒を含む ②白灰色 ③良好	

挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	は 備考
13		D-1 ・東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏底部	i	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②灰色、底部;淡灰茶褐色 ③良好	
14		D-1 · 東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏底部	1	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密 ②淡灰褐色 ③良好	
15		D-1 ·東拡 張区	須恵器 碗底部	i	外:回転ナデ 内:自然釉	①密、1mm以下の砂粒あり ②内;薄灰色(濃緑色の 自然釉かかる)外;濃灰 色 ③良好	
16		D−1 ・東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏底部	i .	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密、微砂粒を含む②淡灰色③良好	
17		D−1 ・東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏底部	底径10.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①微砂粒を含む ②内;淡灰色、外;灰白 色 ③良好	
18		D-1・東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏底部	底径11.4 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密、微砂粒を含む ②明灰色 ③良好	
19		D-1 · 東拡 張区Ⅳ層	須恵器 坏・蓋	口径8.0 cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	①密、微砂粒を含む ②明灰色 ③良好	
20	·	D-1 · 東拡 張区	須恵器 壺肩部	不明	外:自然釉かかる 内:回転痕	①密 ②内;白灰色、濃緑色(自 然釉) ③良好	
21		B-3·EW -B 石垣側	須恵器 壺底部	底径12.0 cm	外:ナデ 内:ナデ	①0.5~1mm程度の砂粒を含む ②内;淡灰褐色、外;灰色 ③良好	
22		B-2~3- イ・I 層下 部	須恵質 鉢 口縁部	口径 26.4 cm	外:ロクロ調整	①1mm程度の砂粒を含む ②薄灰色、口縁;灰色 ③良好	東播系
23		B-2~3- イ・Ⅱ層	須恵質 鉢 口縁部	口径22.8 cm	外:ロクロ調整,ナデ 内:ナデ	①密 ②灰褐色 ③良好	東播系
24		W-B 石 垣	須恵質 鉢 口縁部	口径 26.0 cm	外:ナデ 内:ナデ	①微砂粒を含む ②外口縁;淡黒灰色、そ の他;淡灰褐色 ③良好	東播系
25		B-2~3-	鉢	口径 28.0 cm	外:ナデ 内:ナデ	①微砂粒及び金雲母を含む ②灰褐色 ③良好	東播系

第20表 補足調査出土土器 · 陶磁器観察表 (B-3、C-5、D-1区)

挿図 番号	図版番号	出土地点	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	①胎土②色調③焼成	備考
1		D-1 · 東拡 張区Ⅲ層	陶磁器 碗底部	高台径 8.0cm	外:染付、施釉 内:施釉	①密 ②釉;明灰褐色、染付; 淡藍色 ③良好	唐津 17 c 末
2		C-5	陶磁器 碗 口縁部	口径 12.0 cm	外:染付 内:染付、施釉	①密 ②明灰白色、染付;藍色 ③良好	伊万里 系江戸 後半
3		B-3Ⅲ·I 層	陶磁器 大皿 底部	高台部 8.0cm	内:施釉、目跡が残る	①密 ②素地;淡灰色、釉;灰 白色 ③良好	唐津系
4		В-3 · І	陶磁器皿	口径10.0 cm	外:明茶色 内:染付	①密 ②内;白色、染付;藍色 ③良好	伊万里 系近代
5		B-3 · 耕作 土	陶磁器 皿 口縁部	口径 10.0 cm	外:染付 内:染付	①密 ②乳白色、染付;藍色 ③良好	伊万里 系江戸 後半
6		B-3 · EW -B	陶磁器 碗底部	高台径 5.0cm	外:施釉、圏線 内:施釉、鉄釉の圏線	①密 ②明黄白色、文様;黒褐 色 ③良好	
7		D-1 · 東拡 張区Ⅳ層	須恵器 甕 胴部	口径不明	外:櫛状工具による粗 い波状文、胴部タテ方 向の平行タタキ 内:タタキの当て具に よる円心円文、胴上部 はユビナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②淡灰色 ③やや悪	

(陶磁器)(第47図-1~6)

第47図-1は陶器碗の体部~底部である。唐津焼とみられ、体部には淡藍色の染付が施されている。内・外面に明灰色の釉がかかるが、高台畳付にはかからない。2、4、5は伊万里系染付で、2は碗の口縁部片、4、5は皿の口縁部片である。2は外面体部に藍色の染付を施すが、小片のため、文様は不明。江戸後半に位置付けられる。4は外面は明茶色を呈し、内面は白色の地に明るい藍色で鳥と思われるものが描かれている。5は口縁部内面に斜格子文が描かれ、体部外面には草葉が藍色で描かれる。江戸後半に位置付けられる。3は唐津系の大皿で、しっかりした高台をもつ。内面には灰白色の釉がかかり、目跡が残る。時期は不明。6は粗製の染付碗底部と思われる。見込みの釉をかき取っている。見込みと、外面高台と体部の境に圏線が巡る。

〔考察〕

各区における石塁状遺構の検出状況を整理してみた。要約的にいえば、堰の可能性もあるが、

断言はしえない。台地の南縁の崖面に栗石程度の川原石を盛り掛けるようにして積み上げ、その内部の要所と、出来上がった堤防状の構築物の平坦な頂部が裾にやや大型の川原石を配して安定化を図ったものとすることができる。その建築目的は崖面の保護にあり、とくに長田川の氾濫に対する備えとして築かれたものであることが推考される。検出しえた総延長は約25 m、巾は2~2.2 m 程度、高さは本来は1 m 足らずであったと思われる。構築の時期については、石組みの下方で近世初の陶器片が出土したことから近世に入ってのものとすべきであろう。ただし、これは現在遺存しているものについての年代観であって、以前にも同様の構築物が存したことは考慮にいれてよいであろう。

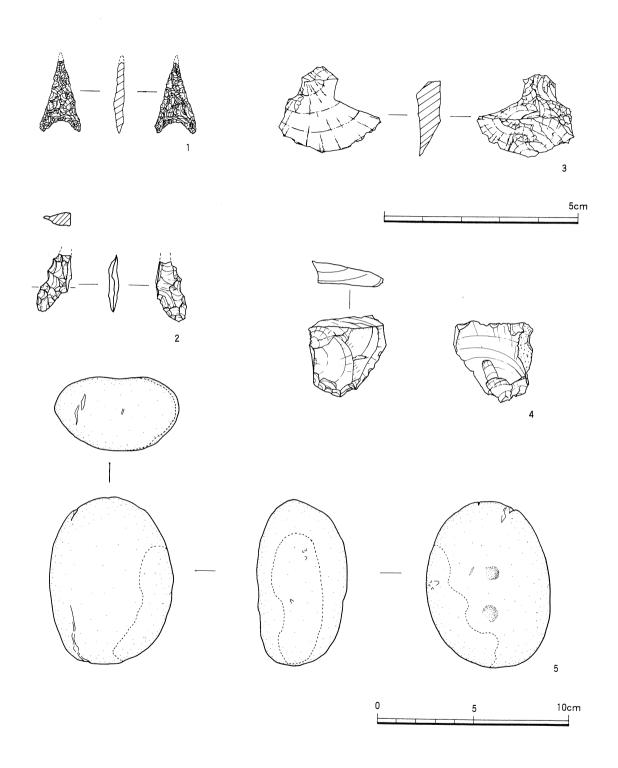
(久保谷浩二)

(7)七渡瀬 I 遺跡出土の石器 (第48回、PL.29)

1は石鏃である。石材は黒曜石。縦1.90cm、横1.10cm、厚さ0.25cm。出土地点は第3号住居址東側ピット群。形状は二等辺三角形を呈し、調整加工は押圧剥離。先端部が少し欠損している。2も石鏃である。石材は黒曜石。縦1.50cm、横0.70cm、厚さ0.25cm。出土地点は G-4区黒色土層(Ⅱ層)中。半分欠損している。調整加工は押圧剥離。3は小型の石匙である。石材は流紋岩の一種。縦2.20cm、横2.60cm、厚さ0.55cm。つまみ部は縦0.65cm、横0.95cm、厚さ0.55cm。出土地点は G-4区黒色土層中(Ⅱ層)。横型で三角形を呈する。4は石材が黒曜石の石器片である。器種は不明。縦2.10cm、横2.00cm、厚さ0.60cm。出土地点は H-3区 IV層直上(Ⅱ層中)。5は蔵石である。石材は流紋岩質凝灰岩で河原の小礫と思われる。縦8.75cm、横3.85cm、厚さ3.85cmの楕円形を呈す。表採。表裏中央部に打痕が認められる。(鉄分付着により不明確。)

七渡瀬 II 遺跡出土の黒曜石は隠岐のものとは限定できず、通常黒曜石とされているものの中でも松脂岩(ピッチストーン)である。一般的には、黒曜石と同一に扱われているものである。

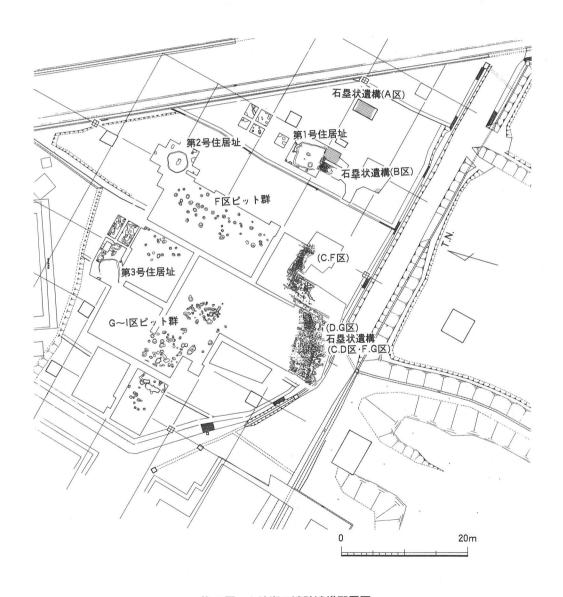
(上原 香里)



第48図 石器実測図 (5は1/2)

4、考 察

七渡瀬Ⅱ遺跡で検出、確認された遺構は、4棟の竪穴住居址(1-a 号、1-b 号、2号、3号)と石塁状遺構、ピット群であった。また、出土遺物としては縄文土器(後期、晩期)、弥生土器(前期、中期、後期)、土師器(古墳前期、奈良・平安期)、須恵器(奈良・平安期、中世)、陶磁器(中世、近世、近代)等が得られている。それに若干の石器類も出土している。いま、これらの遺構・遺物を手掛かりに、本遺跡を集落様相の展開という観点から概観すると次のようになろう。



第49図 七渡瀬Ⅱ遺跡遺構配置図

(1)七渡瀬 『遺跡における集落の展開

〈縄文時代〉

七渡瀬の台地状段丘面が集落地として利用されるようになるのは、検出された土器からすると、縄文時代後期後半のことと考えられる。但し、その出土量から判断して、集落規模は小さかったと思われる。晩期段階になると台地南側の湿地、西側の和紙の館付近、D-4区等から多くの晩期土器が出土しているので集落規模は、やや拡大されていったと推定される。

〈弥生時代〉

縄文時代晩期の集落形成をうけて弥生時代の集落経営が開始される。このことは、当然ながら 稲作農耕の定着と結びついて進められたものと思われる。耕地は集落南辺の長田川の氾濫原に拓 かれたのであろう。

農耕集落の規模としては、前期の土器が D-4区の周辺、和紙の館辺り、南側の湿地から量的にまとまって出土していることや、台地の面積からして、いわゆる「単位集団」・「世帯共同体」が1~2単位存在したものと考えられる。この集落がどのような歴史的展開を遂げたかについて語りうる資料はないが、弥生時代中・後期の土器もそこそこ出土している状況からすれば、弥生時代の各期を通じて「単位集団」程度の集落が存続していた可能性はある。

〈古墳時代〉

七渡瀬 II 遺跡で集落が存在したことが確証されるのは、弥生時代末ないし古墳時代初期である。すでに度々示したように、この期に属する竪穴住居址は3棟が知られ、それらは相互に適当な間隔を置いて分布している。これらが一まとまりの「単位集団」を構成していたことは想像に難くない。

さらには、竪穴住居址が複数検出されたことに止まらず、いわゆる「布留甕」に系統を引くと思われる古式土師器がかなりの量で検出されていることに注目したい。こうした事実を勘案すると、先の3棟以外にも住居の存したことがうかがわれ、同じ「単位集団」としても小さくない規模の集団が居住していたことが想定される。

〈奈良・平安時代〉

古墳時代初期以降、七渡瀬の台地に集落が営まれたことが明確なのは、奈良時代後半から平安時代の初期にかけてであろう。検出された住居址は1棟のみで集落の規模等は不明であるが、この時期の須恵器は遺跡全体で出土しており、数棟の住居からなる集落が存在した可能性は高い。また F-3区、G-3区を中心に検出されたピット群中には、この頃の掘立柱建物に属するものがあると考えられる。

〈中・近世〉

輸入陶磁器や近世陶磁器片がかなり出土していることからみて、中・近世にも屋敷地のような形で本台地が利用されたことは十分予測しうるが、具体的な構造物の遺構としては捉えられなかった。ただ、陶磁器類は遺跡全体から出土しているが、出土密度が濃いのはB区であり、B-

2区、B-3区では、柱穴様のピットもややまとまって検出されているので、台地でも少し高位の個所に当たる A、B 区に中・近世の建物が存在した可能性が高い。また、検出された顕著な遺構として石塁状遺構のあることは度々触れたが、その年代は近世後半以降と判断された。しかし、長田川の攻撃面に当たる南辺が、早くから護岸的施設によって固められていたことは想定できるので、このような石塁は早くから構築され、修復されながら存続していたのではなかろうか。

以上の概観から知られるように、本遺跡では縄文時代後期以降、幾度かの盛衰状態を繰り返しながらも継続して集落が営まれてきており、このことが集落址としての一つの特徴といえるのではなかろうか。また、縄文晩期・弥生前期、弥生終末期・古墳前期、奈良後期・平安前期、中世末・近世初期等に相対的にではあるが、集落の活性期が認められることも重要である。

このような諸期は、いわば歴史上の変動期に当たっており、そこでは人、物の活発な往来と交流が進んだ時期でもあった。本遺跡における遺構・遺物のありようは、陰陽境に位置した小盆地の中核的集落にもそうした歴史動向の一端が反映されたものとみることができよう。

ところで、近年中国山地域において、各時代の集落址の調査が活発であるが、それらとの対比においても本遺跡における集落の展開相を推定することができる。縄文時代後期から晩期・弥生前期の動向については、さしあたり、匹見町域の調査が参考になる。同町では、縄文時代を通じて一貫して集落の展開が看取されるが、とりわけ後期からは活発な居住が認められ、晩期にもこのような傾向が継続している。石ヶ坪遺跡、水田ノ上遺跡、ヨレ遺跡、イセ遺跡が当該期の集落もしくは「斎場」遺跡として知られる。また、これらの遺跡と重複するか、あるいは隣接して進められたことが推定されている(1)、その他頓原町森遺跡群(2)、仁多町下鴨倉遺跡(3)等にも同様な傾向を見て取ることができる。七(1)渡瀬遺跡群における縄文後・晩期から弥生前期の集落動向は、これらの諸遺跡の事情に照らせば、より具体的に理解することができるように思われる。

弥生時代末期から古墳時代前期にかけては3棟の竪穴住居址の検出によって集落の存在が確認されたが、石見地方でこの時期の集落跡が捉えられたのは、管見では初めてのことである。同時に「布留甕」系の土器がかなりの量出土したこともあって、畿内方面との繋がりの浅くないことが知られた。旭町重富遺跡では古墳時代前期の土壙墓群が発見されており⑷、石央山間部の古墳時代前期の情報も増大しつつあるが、なお顕著な古墳の存在は認められず、わずかに石見町中山墳墓・古墳群等の小規模な古墳が位置付け部に見出されるのも一つの地域色といえる⑸。ともあれ、畿内方面との諸関係が強まり、それが地域史上の画期を作り出す要因になっていることは七渡瀬Ⅱ遺跡で判明した事実からも確認しうる。

奈良後期・平安前期に竪穴住居址をともなう集落が営まれたことは十分推定しうることとした。この時期の集落址は先の重富遺跡で捉えられ、匹見町長グロ遺跡でも同時期の竪穴住居址が検出されている⁽⁶⁾。また、石見町の矢上川沿に同時期の遺物散布地が多数存在する事実も確認済みである⁽⁷⁾。森Ⅰ・Ⅱ遺跡における奈良時代集落址は掘立柱建物と竪穴住居が併存する中程度の

集落とみた⁽⁸⁾。竪穴住居の消失の問題をも視野に入れた調査と研究が求められるところである。

奈良時代の中葉から平安時代前期にかかる集落址は石見地方の沿岸部でも発見例が増えている。その中で石見空港関連遺跡として調査された益田市大溢遺跡の集落址は、また別のタイプの集落の存在を示唆して興味深い。海岸沿いの丘陵南の緩傾斜面を階段状にカットして造成した平坦面に掘立柱建物数棟が建てられている。これらは一単位の家族的結合を有する集団の集落とみられるが、その生業として畑作を含む農業と小規模な漁業を複合的に営んでいたことが推定される。この集落址には製塩土器や鍛冶の遺構・遺物(製錬滓もある)がともない、鉄鏃、刀子等の鉄器が検出されている⁽⁶⁾。このような自給的自立経営の色彩を帯びた集落が、けっして生産・居住条件に恵まれたとはいえないような海浜辺の丘陵上に出現する意味は小さくないように思われる。いずれにしても、奈良後期・平安前期は、石見地方の古代集落発達史において注目してよい時期であろう。今後は石見国府の設置の問題などとも関連させて追及していく必要が感じられる。

中・近世の遺構群は、石塁状遺構とピットの検出に止まったのであるが、中世の館跡等については益田氏関連遺跡として注目を集める益田市三宅居跡と七尾城跡の調査で実態が判明しつつある。七渡瀬 II 遺跡については、出土陶磁器の研究はもとより、近接する一本松城跡の調査とも併せて実態解明の前進することが期待されよう。

(田中義昭)

註

- 1. a)渡辺友千代他『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会、1990年 b)渡辺友千代『水田ノ上遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会、1991年。 c)渡辺友千代・矢野健一他『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』匹見町教育委員会、1993年。
- 2. 柳浦俊一他「森遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』2、島根県教育委員会編、1994年

柳浦氏他調査の森遺跡は、その後これに続く遺跡の調査によって、「森Ⅰ遺跡」とされている。 頓原町教育委員会による「森Ⅲ遺跡」の調査(1993~1994年)では、縄文晩期、弥生後期、古墳 後期、奈良時代の集落跡が検出されている。報告書未完。

- 3. a) 杉原清一『下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』仁多町教育委員会、1981年 b) 杉原清一他『道路改良工事に伴う第2次発掘調査報告下鴨倉遺跡』仁多町教育委員会、1990年
- 4. 足立克己他「重富遺跡」『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 IV、島根県教育委員会、1992年
- 5. 『石見町の遺跡』、石見町教育委員会、1983年
- 6. 註1-b に同じ
- 7. 『島根県邑智郡石見町内遺跡詳細分布調査報告書 I —石見町遺跡第二集』、石見町教育委員会、1991 年
- 8. 註-2に同じ、森Ⅲ遺跡については調査担当者より教示を得、田中が現地実見。
- 9. 西尾克己「大溢遺跡」『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』、島根県教育委員会、1992年

(2)七渡瀬 Ⅱ 遺跡出土土器・陶磁器の様相

①縄文土器

七渡瀬Ⅱ遺跡の縄文時代遺物としては、後、晩期の土器がある。

縄文時代後期の土器は、4片出土しており、後期中葉の鐘崎式系土器と考えられる。これらは、C-1、C-4、 $F-3\cdot 4\cdot 5$ の各区から断片的に出土している。

縄文時代晩期の土器は、突帯文土器が比較的まとまって出土しており、ある程度様相が明らかにできる。これらは晩期後半の土器と考えられるが、調査の際には、晩期の単純な包含層などは確認しておらず、資料の一括性などについては出土状況からの検討は難しい。また、内容的には、突帯文土器には中山 B 式と考えられる土器も僅かに認められるが、これとその他の突帯文土器との関係は明らかではない。

第26図-3、4は中山 B 式土器⁽¹⁾と考えられ、これらは同一個体とみられるが、口縁下に刻み目突帯を施し、頚部には多条の沈線を交叉させて施しており、器面はナデもしくはミガキで丁寧に整えられている。なお、口唇には刻目を施さない。胎土は、このほかの突帯文土器にくらべて精良で、雲母をふくんでいる。これらは、C-4区の弥生末~古墳時代初期の住居址付近から出土した。

この他の晩期土器について一括して紹介すると、器形の明らかなものでは、深鉢、浅鉢がある。深鉢は、頚部のややくびれる土器(第43図-6、8ほか)と直口の土器(第44図-16)があり、これらはいずれも口縁下に刻目突帯文を施している。口唇部は、頚部のややくびれる土器では、刻み目を施した土器が中心となるようであり、直口の土器は1個体しか確認できていないが、刻み目を施していない。なお、第43図-8は、口唇を僅かに欠いており、現状では、刻み目の有無を確認できなかった。器面の調整については、破片のため口縁部付近の状況しか分からないが、外面調整にはナデ、削痕、条痕が認められ、ナデを施した土器が目立つ。これらの土器は、胎土に砂粒を多く含んでおり、雲母は認められない。なお、第37図-2は、深鉢頚部片と考えられるが、文様を施しており、縦位に刷毛状工具で文様を施し、これを中心に両側に沈線を斜めに施している。胎土には、雲母が認められる。

浅鉢は、確認できた土器では、第44図−18のように肩部が屈曲し、頚部が短く、口縁内側に段状の沈線を施した土器がある。胎土に雲母を含む。次にこれらの土器の位置付けについて、突帯文土器を中心に、予察的ではあるが考えてみたい。石見地域では、金城町の隣の美濃郡匹見町イセ遺跡から、中山 B 式土器と突帯文土器が出土している⁽²⁾。イセ遺跡の突帯文土器は、口唇部を刻む土器が少ないという特徴をもつが、こうした特徴と突帯を指で刻んだ可能性のある土器の存在などから九州地方の突帯文土器との関係も想定し、突帯文土器の中でも古い様相である可能性も示している⁽³⁾。一方で瀬戸内地域で口唇部を刻まない土器が新しく位置付けられていることから、こうした特徴を瀬戸内との地域差とみるかあるいは瀬戸内にならって新しいとみるかが課題とされていた。七渡瀬Ⅱ遺跡の突帯文土器は、イセ遺跡とは様相が異なり、口唇部を刻む土器

が一定量認められ、こうした手法が石見地方山間部にも及んでいることは確かといえる。また、 両遺跡は地理的に近く、こうした様相の差は時期差の可能性も考えられるが、今少し中国地方西 部の突帯文土器の検討をすすめて、この問題を考える必要がある。

また、島根県下の突帯文土器については、出雲地方を中心に、川原和人氏(4)や、柳浦俊一氏(6) らにより考察がくわえられている。柳浦氏によると、飯石郡頓原町森遺跡出土突帯文土器について、型式的な検討によって、(a)口唇部と突帯に刻み目をもつ土器を古相とし、(b)突帯のみに刻み目をもつ土器および(c)刻み目のない土器を新相としている。新相の土器には2条突帯と考えられる土器も含まれており、古相の土器を瀬戸内地方の前池式に、新相の土器を沢田式に対比している。また、松江市石台遺跡では、比較的単純な様相の突帯文土器が出土しているが、口唇部が先細りし、また刻み目は、口唇部に入れられる土器は非常に少なく、新しい様相の突帯文土器と考えられており、突帯文土器に時間的に変遷のあることの根拠とされている。七渡瀬Ⅱ遺跡の突帯文土器とこれらの遺跡の土器とを比較すると、口唇部の形状や刻み目の有無などからすると、今回出土した土器は、森遺跡古相の土器と森遺跡新相の土器あるいは石台遺跡の土器の中間的様相とも捉えられる。問題は、当地方の突帯文土器の変遷の過程で、こうした段階を想定できるかどうかということであるが、一括資料および層位的資料が不足しており、まだ十分にこうした議論が行えない。今後、さきに述べた地域性の問題も考慮にいれながら突帯文土器の様相を考えていきたい。

②弥生土器

今回の調査では、前期の土器が多く出土したが、中期、後期の土器は前期のものに比べるとその量はわずかであった。以下各時期の土器の様相と特徴について述べる。

(前期の土器)

細片が多いが、壷形土器と甕形土器の存在が認められる。壷形土器には口縁端部に面をもつもの (第29図-2)と頚部に5条のヘラ描き直線文を施し、口縁部の外反するもの (第29図-3)がある。また肩部が無文で、明瞭な段をもつもの (第10図-1)、1~3条のヘラ描き直線文を巡らし、その下に羽状文を施すもの (第10図-2、3、第37図-11)や羽状文を縦方向のヘラ描き直線文で画すもの (第29図-4)、2条のヘラ描き直線文の下にヘラ状工具により2条の重弧文を施すもの (第29図-5)、斜格子文の下に2本のヘラ描き直線文を巡らし、その間に列点文を施し、その下に羽状文を施すもの (第37図-9)、2、3条のヘラ描き直線文を施すもの (第37図-14、15)などがある。第37図-14は一番下の凹凸をハケメ原体で下方に押圧し、その後にミガキを加え、突帯のように見せるものである。この手法は削出突帯の退化型式として把えることができるかもしれない。

甕形土器は口縁部が如意状を呈するもので、口唇部に刻み目をもつものともたないものがあり、刻み目はヘラ状工具を口唇部に押圧するものとヘラ状工具により刻みを入れるものがある。

口縁下部の屈曲部にヘラ描き直線文を1条巡らせるもの(第29図-8、第37図-6)、2条巡らせるもの(第26図-6)、3条巡らせるもの(第37図-7)、4条巡らせるもの(第29図-12)、ヘラ描き直線文の上下に列点文を巡らすものなどがある(第10図-5、第43図-9)。また、1条のヘラ描き直線文を巡らし、それ以下をハケメ調整し、段のように見せるものはあるが、胴部に段をもつものはない。

こうした諸様相を広島県の中国山地の土器と比較してみることにする。中国山地の前期の弥生土器の編年研究は伊藤実氏によって行われており、氏は中国山地と広島県の沿岸部の土器との違いを指摘している(6)。この中で、沿岸部の前期弥生土器の変遷は4期に区分されており、1期は「『段』技法の多用」、2期は1期とプロポーションのうえでは大きな変化はないが、壺に「木葉文、羽状文、重弧文などのヘラ描文様が多用」され、甕では、「『段』技法を用いるものがほとんどなくなり、頚部に1~3条のヘラ描沈線」をもつものが多くなるとしている。また、3期は「『削出突帯』の出現と盛行」、4期は「前期の最終段階」で、「沈線条数の著しい増加」、「貼り付け突帯・円形浮文」の多用期とされている。

こういった沿岸部における土器の変遷と中国山間部の土器と比較した場合、「貼り付け突帯が見当たらない」点と「瀬戸内の同期の土器群に比べて全体的にやや古い形態をもっていること」が挙げられており、削出突帯は「中国山地の3期の土器に特徴的」とされている。こういった特徴づけを参考にして本遺跡出土の前期壺形土器をみると、1期に属すると思われるものは、肩部に段をもつ壺形土器(第10図-1)である。2期に属すると思われるものは肩部に文様を施すものである。これらの文様の原体はほとんどがヘラ状工具であり、貝殻の縁部によるものは2例を数えるのみである(第37図-9、11)。また、3期において中国山地に特徴的な削出突帯の典型的なものはなく、退化したようなものがみられるのみである(第37図-14)。

壺形土器には3期に当たる良好な例はなかったが、甕形土器には3~5本程度のヘラ描直線文を 巡らしたものがある。貼り付け突帯をもつものが存在しないという状況は、伊藤氏がいわれるよ うな中国山地の前期土器の傾向と一致している。

以上のことから、本遺跡における前期弥生土器は、中国山地に顕著な削出突帯の典型的なものがないことと中国山地ではみられない貝殻施文の土器があることが中国山地の山陽側の土器様相と異なる点といえる。

(中期の土器)

個体数は少ないが、特徴的なものを挙げると壺形土器では外面に貼り付け突帯を巡らし、口縁端部上面に平坦面をもつもの(第26図-9)、口縁端部に2条の凹線文を巡らせるもの(第43図-11)、甕形土器では逆「L」字形に屈曲し、口縁部よりやや下に刻み目を入れてあるもの、あるいは刻み目を施さない突帯を巡らすもの(第29図-14、第37図-13)、口縁部に2条の凹線文を巡らせるもの(第43図-12)などがある。前者のようなタイプの甕形土器はバラエティはあるが山口県東部や愛媛県の松山平野に多く分布することから西部瀬戸内的な土器といえる。また、口

縁端部に凹線文を施すものは中期後半に畿内、山陽、山陰で盛行するものであるが今回の調査では出土量がわずかなために盛行したかは不明である。高坏かと思われるがなお器種不明なものに7条の凹線文を巡らす脚部(第37図-16、17)がある。

(後期の土器)

個体数はきわめて少なく、複合口縁をもついわゆる「山陰系土器」は出土していない。しかし、町内の長田郷遺跡では「山陰系土器」が出土していることから、「山陰系土器」の分布圏から外れているのではないと考えられる。器種としては高坏のものと思われる脚が出土している。これらの中で黒色にいぶされた同心円スタンプ文をもつもの(第24図-3)は当地においてみられないものである。スタンプ文は山陰地方東部に多くみられるので、あるいはこの方面から搬入されたものかもしれない。

③土師器

細片がほとんどであるが、多くの甕形土器と少量の高坏が出土している。甕形土器において技法上特徴的なものを挙げると、口縁端部内側を肥厚させるものと口縁端部外面を外側に引き出すものがある。前者は畿内でいう庄内式とそれに続く布留式にみられる手法である。これらの土器が庄内式、布留式のどちらに属するかということが問題となるが、出土土器の胴部片にタタキメの入ったものがないことや、胎土が良く選ばれていることからすれば、布留式に系統をひくものと考えるべきであろう。

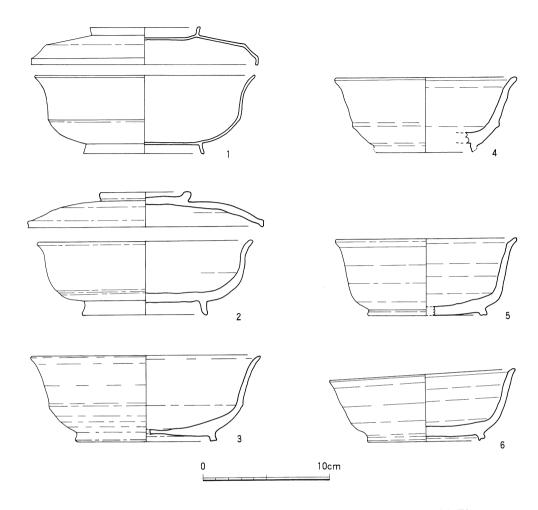
後者については、いわゆる山陰系の壺形土器および、甕形土器にみられる技法である。こうした手法は例えば、鹿島町・南講武草田遺跡における編年の6、7期に存在するものである⁽⁷⁾。また、2号住居址の床面直上で出土した甕形土器(第26図-17)も複合口縁甕 (第27図-1)との共伴関係からして草田6、7期に時期位置が与えられ、出雲方面からの招来品の可能性もあるが、類例がなく在地土器とも考えられる。

4)須恵器

今回の調査においては古墳時代の須恵器は出土せず、奈良時代から平安時代にかけての須恵器が出土した。器種には細片が多いが、蓋坏、壺、甕、盤がある。以下、最も多く出土した蓋坏についてみていくこととする。

蓋はいずれも輪状つまみで、天井部から口縁部にかけて屈曲し、口唇部を下垂させるものである。口径は14cm以上である。

坏は高台をもたないものともつものがあるが、量的には高台をもつものが圧倒的に多い。前者の底部調整は、回転ヘラケズリのもの(第30図-19)、ヘラ切り後にナデ調整を施すもの(第38図-31)、糸切りするもの(第30図-20)などがある。これらの中で全容の分かるものでは、底部ヘラ切り後にナデが施され、体部は外傾してまっすぐに延び、口縁端部は鋭く仕上げられてい



- 1. 長刀坂古墓(京都府) 2. 光明池 2 2 号窯跡(大阪府) 3. 七渡瀬Ⅱ遺跡(島根県)
- 4. 長グロ遺跡(島根県) 5. 6. 大溢遺跡(島根県)

第50図 金属製の蓋杯とその模倣須恵器蓋杯の変遷図

る。

後者はいずれも低い高台を伴う。高台が底部のやや内側につくもの(第24図-21)と底部の端に付くものの別がある。器高も3.5cm程度の低いものと6cm程度の高いものがある。高台の形態には底面が全面接地するものと内面接地するものとがあり、また、底面の形態には平坦なものと逆凹状を呈すものがあるが、後者のタイプの高台は石見地方でみられるものである。

本遺跡に特徴的な高台の作りとして、底部と高台外面の境界にヘラ状工具による沈線を入れることが挙げられる(第24図-21、第43図-13)。

これらの蓋坏は、益田市石見空港予定地内遺跡出土の須恵器編年に当てはめると、高台がやや底部の内側につくもの(第24図-21)はII-1期に、その他は $II-2\sim3$ 期に位置付けられる(8)。今

回の調査では金属器写しの須恵器と思われるものが出土している(第24図-18、19)。これらについては、実測図を別々に示したが同一個体とも考えられ、これらを合成したものが第50図-3である。その形態は低い高台をもち、体部で大きく屈曲し、さらに外反しながら口縁部に至るものである。このタイプの坏は、京都府長刀坂古墓の金属製の蓋坏(第50図-1)を須恵器で模倣した大阪府光明池22号窯跡出土例(第50図-2)の系譜に繋がるものと考えられる⁽⁹⁾。ただし、これは高い高台をもち、体部で大きく屈曲し、その部分に1条の沈線を巡らし、外反して口縁部に至るものである。

石見地方において、これらに類似するタイプの須恵器についてみると、管見では匹見町長グロ遺跡102住居址出土例(第50図-4)⁶⁰、益田市大溢遺跡出土例(第50図-5、6)がある。この例と本遺跡出土の須恵器を比較すると、長グロ遺跡のものが体部の屈曲度が弱く、外面に突帯を作り出して段を表現している。大溢遺跡のものは体部で大きく屈曲するが、屈曲部はかなり下になり、沈線も突帯も施されない。あるいは、口縁端部は外方に引き出している。また、体部の屈曲度が弱くなり、通常の坏と変わらないようなもの(第50図-6)もある。これらの時期については光明池22号窯跡出土のものは8世紀第4四半期に位置付けられ、大溢遺跡のものは9世紀前葉に位置付けられている。本遺跡出土の坏と長グロ遺跡出土の坏は体部に段を表現しており、形態的に光明池22号窯跡出土例より後、大溢遺跡出土例より前に位置付けられよう。

⑤中・近世の土器、陶磁器

今回の調査では細片であったが、ほぼ全ての調査区から中・近世の土器、陶磁器が出土した。 遺物の時期は、大部分が近世(近代も一部あり)のものである。

(中世)

中世のものとしては中国陶磁、東播系須恵器がある。輸入陶磁器は青磁2点、白磁5点、青花2点が出土している。青磁はいずれも碗で、鎬連弁文をもつ龍泉窯系のもの(第10図―10)と無文のもの(第10図―11)がある。前者は13世紀初頭~中頃、後者は14世紀~15世紀前半に位置付けられよう。白磁は碗が3点(第24図―30、31、32)、皿が2点(第24図―25、26)出土している。第24図―31はV類中含まれる碗で、12世紀中頃~後半に位置付けられる。第24図―25はⅢ類の皿で内面下位に浅い沈線をもち、見込みの釉をかきとるものである。12世紀中頃~後半に位置付けられる。第24図―26は白磁皿であり、内・外面に灰白色の釉がかかる。16世紀代のものと思われる。青花は碗が1点、皿が1点出土しているが、薄手で磁器質のもの(第24図―29)と、やや厚手で陶器質のもの(第47図―6)があり、注意される。前者は16世紀代、後者は16世紀後半~17世紀前半に位置づけられると思われる。また、古代末~中世の朝鮮半島系の須恵質土器と思われるものも出土している(第43図―16)。これは、壺の胴下部から底部のもので、11世紀後半~12世紀前半のものと思われる。

これら中世期の遺物は、特にB-2区から集中して出土しており、周辺に何らかの建物があっ

たと考えられる。なお金城町では、輸入陶磁器として岩塚Ⅱ遺跡から青磁碗(14世紀頃)、長田郷遺跡から青磁連弁文碗(14世紀頃)、城ノ前遺跡から青磁碗が出土している^四。

国内産のものは東播系の鉢が出土している(第46図-22~25ほか)。これらは、逆「く」の字状に肥厚させた口縁をもつ須恵質土器であり、13世紀中頃~14世紀の魚住窯のものと思われる。魚住窯の製品の県下における出土は、松江市大草町天満谷遺跡心から鉢が、松江市東津田町石台遺跡心、仁摩町白石遺跡心から甕が出土している。また金城町内では、長田郷遺跡から鉢が出土している。

(近世・近代)

近世のものは、肥前系陶磁と在地の石見焼が多くみられる。器種としては碗が最も多い。肥前系陶磁は、中でも第39図-41のような「木原唐津」と呼ばれる陶胎染付と伊万里系の染付磁器が多くみられる。また胎土目の跡を残す唐津の皿もみられる。(第39図-39, 第47図-3)江戸時代全般のものが出土しているが、特に17世紀終末~18世紀初頭にかけてのものが多いようである。

石見焼のものとしては、鉢、碗、皿、壺が出土しているが、特に鉢と碗が多くみられた。第39図-46は口縁端部を外方におりまげた、片口鉢である。皿には鉄釉によって文様を描いたものもみられる。(第27図-24)また、図示していないが、在地の布志名焼も出土している。

(竹広文明・増野晋次・久保谷浩二・細田美樹)

註

- 1. 松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻・総説編、広島市役所、1961年 松崎寿和・潮見浩「広島県中山遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版、1961年
- 2. 渡辺友千代・矢野健一他『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』匹見町教育委員会、1993年
- 3. 矢野健一・中川寧・中村豊「島根県県匹見町イセ遺跡の資料紹介―土師器・弥生前期・縄文晩期 の土器―」『島根考古学会誌』第11集、1994年
- 4. 川原和人「島根県におる縄文晩期凸帯文土器の一試考—松江市石台遺跡出土の凸帯文土器を中心 にして—」『島根考古学会誌』第1集、1984年
- 5. a)柳浦俊一「島根県の縄文時代後期中葉〜晩期土器の概要―飯石郡頓原町森遺跡出土土器を中心 に―」『島根考古学会誌』第11集、1994年
 - b)柳浦俊一他『森遺跡 板屋 I 遺跡 森脇山遺跡 阿丹谷辻堂跡』『志津見ダム建設予定地内埋蔵 文化調査報告書』2、島根県教育委員会、1994年
 - c)柳浦俊一・守岡正司他『石台遺跡Ⅱ─馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告─』島根県教育委員会、1993年
- 6. 伊藤実「中国山地の弥生土器―広島県比婆郡高野町・建釜遺跡の弥生前期土器―」『芸備』第21集、 1992年
- 7. 2号住居址の記述の(2)に同じ
- 8. 西尾克己「第5章 大溢遺跡」『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会、1992年
- 9. 小笠原好彦·西弘海「考察 土器」『平城宮発掘調査報告』、1986年
- 10. 渡辺友千代「第4章 長グロ遺跡」『水田ノ上 A 遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡」、1991年
- 11. a)横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について―型式分類と編年を中心にして『九州歴史資料館研究論集』4集、九州歴史資料館、昭和53年
 - b)山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社、1995 年
- 12. a)金城町教育委員会『遺跡分布調査報告書 I —金城町波佐・長田地区— 1、1986年

- b)金城町教育委員会『遺跡分布調査報告書Ⅱ』、1987年
- 13. 島根県教育委員会『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(天満谷遺跡)、1987年
- 14. 島根県教育委員会『石台遺跡』、1986年
- 15. 仁摩町教育委員会「白石遺跡」『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』、1989年。
- 16. 註-12と同じ

5、総 括

公民館建設という地域の活動拠点づくりのために十分な発掘調査を展開することはできなかったが、町当局、教育委員会、町民有志多数の全面的な援助、協力によって基本的な課題と目標は 遂成できたと考える。その要点を列挙してまとめにしよう。

- ① 七渡瀬 II 遺跡は、縄文時代後期後半から現在に至るまで波佐・長田地区の中心街区をなしていた。
- ② 波佐・長田地区は周布川の上流部にあり、石央地域と山陽地方を結ぶ幹線ルート上にあり、 石央への出入口としての位置を占めている。

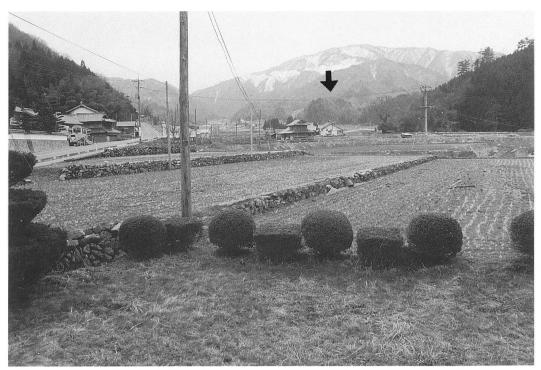
七渡瀬Ⅱ遺跡は、そうした陰陽往来の駅的な性格を有していたと考えられる。

③ 同時に戦略的要地の性格も具備しており、その傾向は、古墳時代初期・中世期に顕著に伺え た。

以上のように山間部の情報収集・発進基地・戦略基地としての役割を荷ってきた七渡瀬遺跡群を今日に活かす意味でも、建設された公民館施設の活気ある利用が行われることを期待したい。 (久保谷浩二・田中義昭)



波佐地区の全景 (大佐山より撮影)



七渡瀬Ⅱ遺跡調査前の状況(北より)矢印・千年比丘1号墳



七渡瀬Ⅱ遺跡調査前の状況(東より)



試掘B-1区東壁



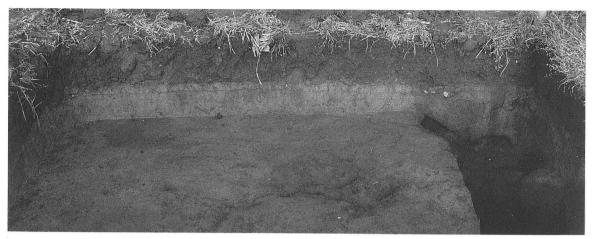
試掘C-1区東壁



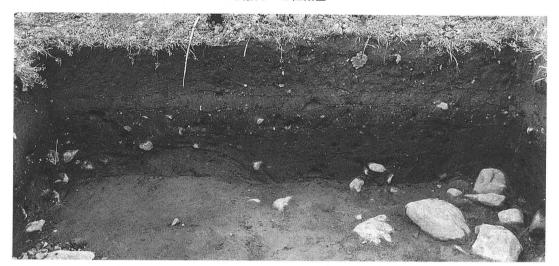
試掘B-2区全景と東壁



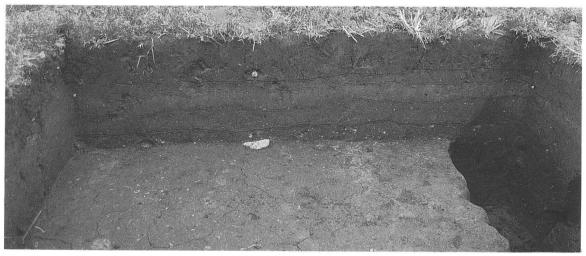
試掘 B - 3 区全景と東壁



試掘C-2区東壁



試掘C-4区東壁



試掘C-5区東壁



試掘D-2区東壁



試掘D-3区東壁



試掘D-4区全景と北壁



試掘 E — 1 区東壁



試掘 E — 4 区東壁



七渡瀬Ⅱ遺跡調査区全景(南東より)



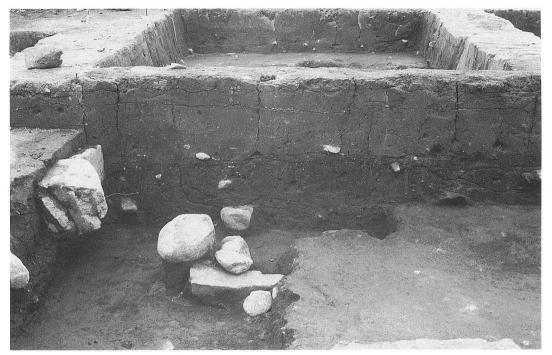
七渡瀬Ⅱ遺跡調査区全景(北より)



C-1区NS-B断面(西より)



C-1区縄文晚期土器検出状態



1号住居址NS-Bセクション南半分(東より)



1号住居址全景(東より)



1 一 b 号住居址かまど



石塁状遺構・B区(東より)



石塁状遺構・B区(南より)



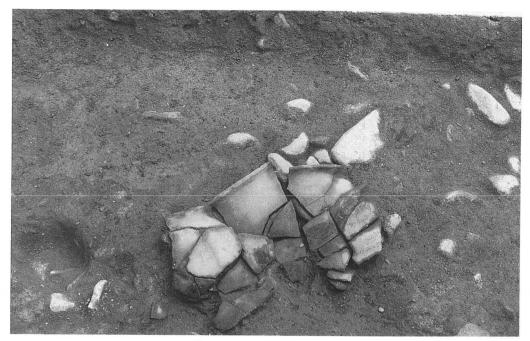
B-2~B-3中間区遺構検出状態(南より)



2号住居址全景(南西より)



2号住居址内土器出土状態



2号住居址内土器出土状態



2号住居址内土器出土状態



2号住居址復元全景(南西より)



3号住居址全景(南西より)



第2次調査区全景(北東より、手前はG-3区)



G-4区ピット群検出状態(北側より)

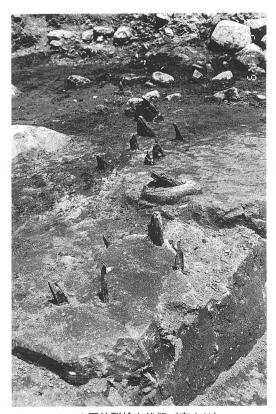
F-3~4区ピット列検出状態



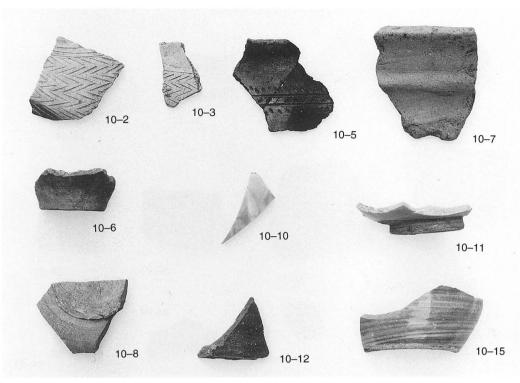
F — 5 区石塁状遺構検出状態 (南より)



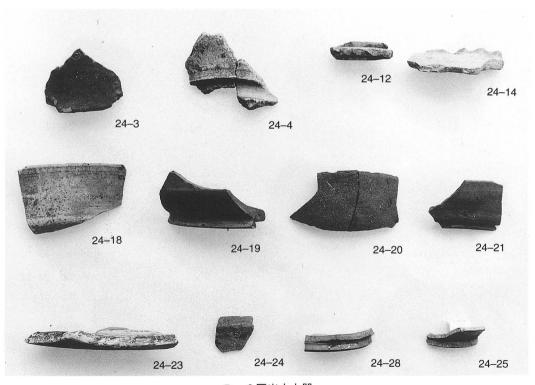
F-5~6区、G-6区石塁状遺構検出状態(西より)



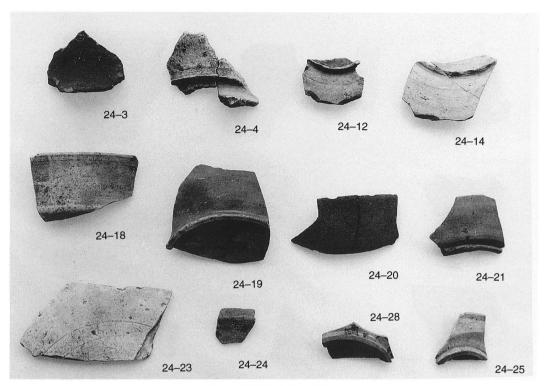
G-6区杭群検出状態(南より)



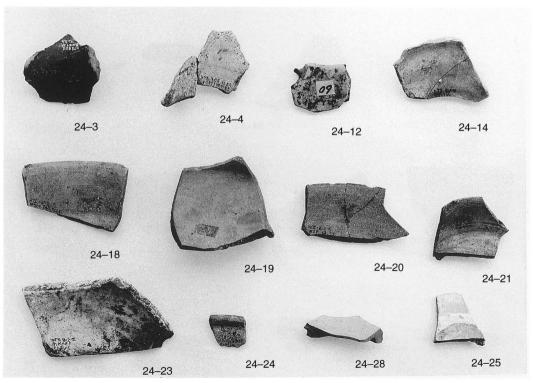
試掘調査出土土器



B-2区出土土器



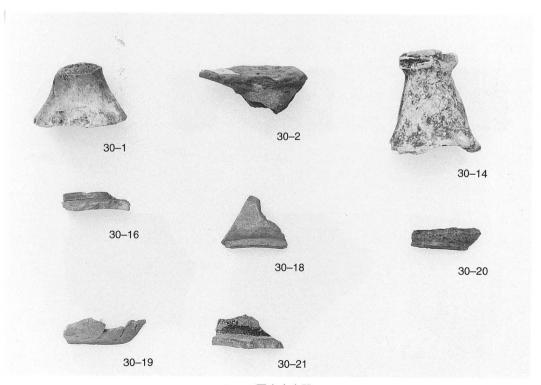
B-2区出土土器(表)



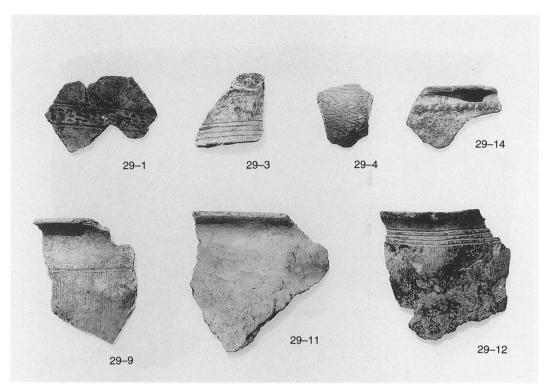
B-2区出土土器(裏)



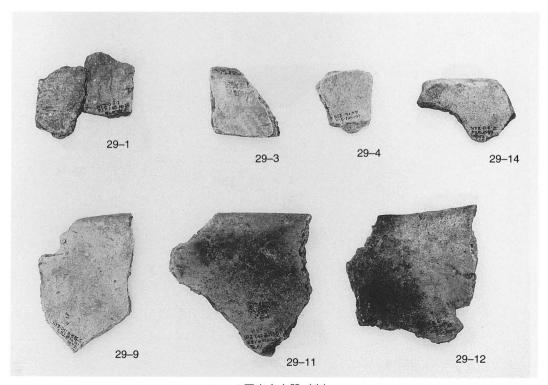
C-4区出土土器



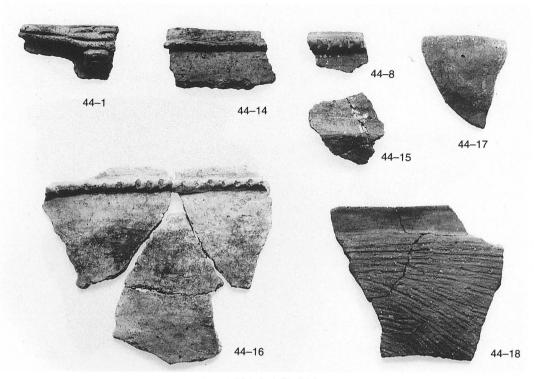
D-4区出土土器



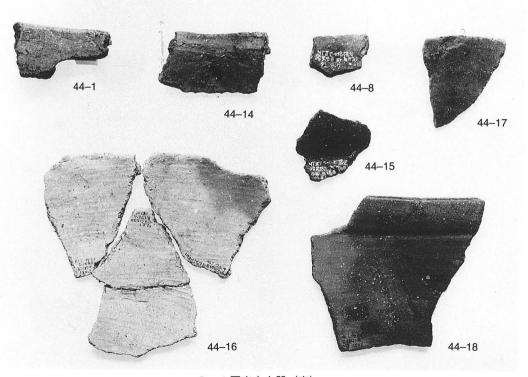
D-4区出土土器(表)



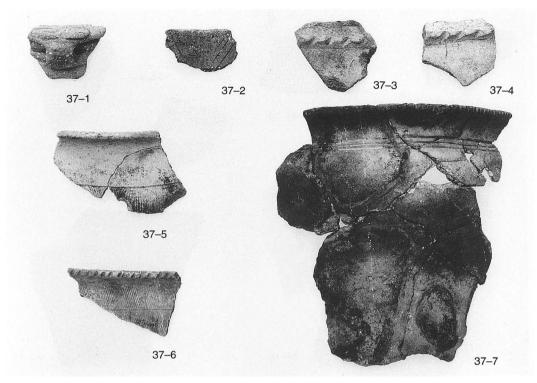
D-4区出土土器(裏)



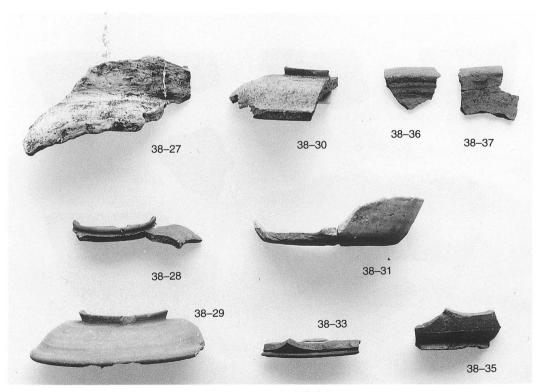
C-1区出土土器(表)



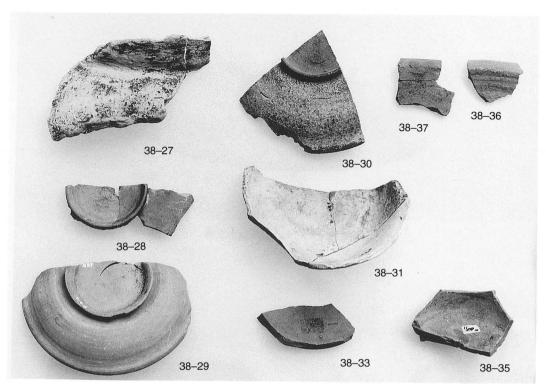
C-1区出土土器(裏)



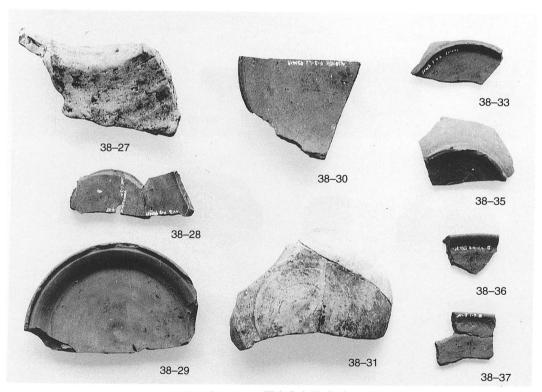
F-3.4.5区出土土器



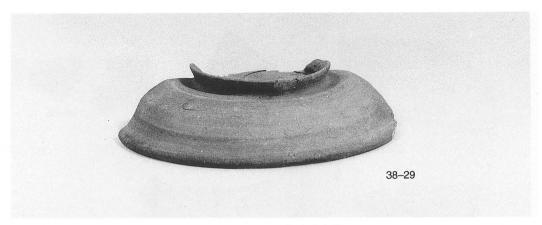
F-3.4.5区出土土器



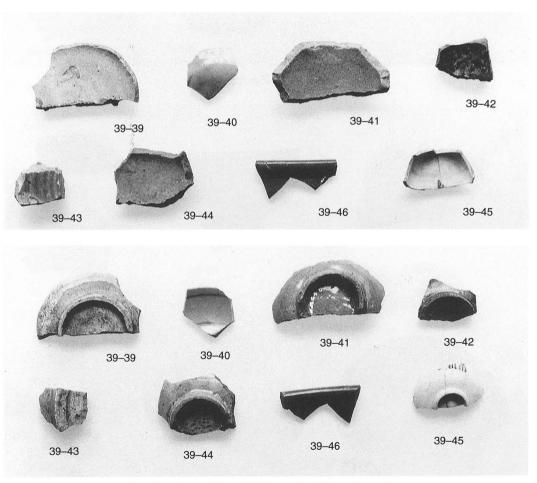
F-3. 4. 5区出土土器 (表)



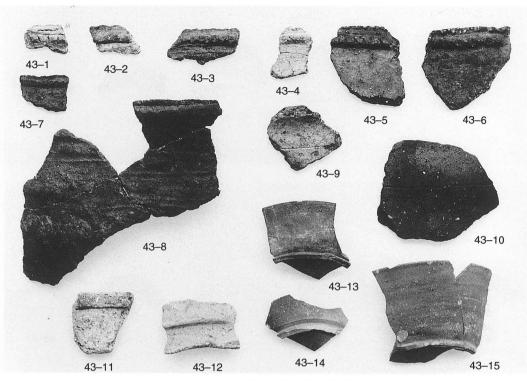
F-3. 4. 5区出土土器(裏)



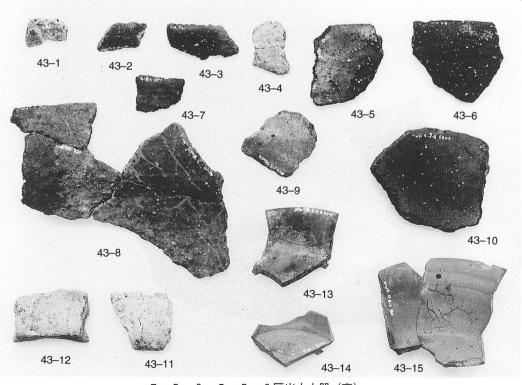
F-3.4.5区出土土器



F-3.4.5区出土陶磁器(中段:表、下段:裏)

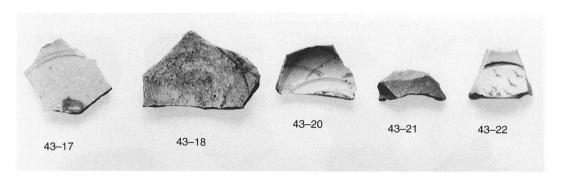


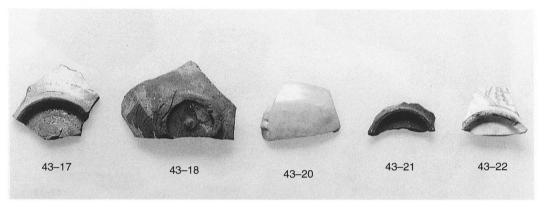
F-5.6、G-5.6区出土土器(表)



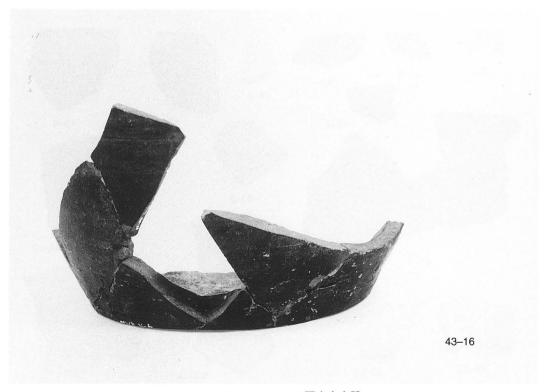
F-5.6、G-5.6区出土土器(裏)

PL.28

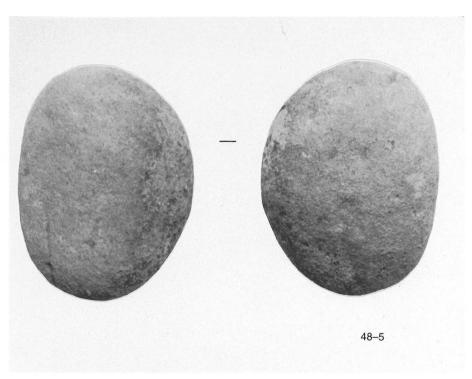




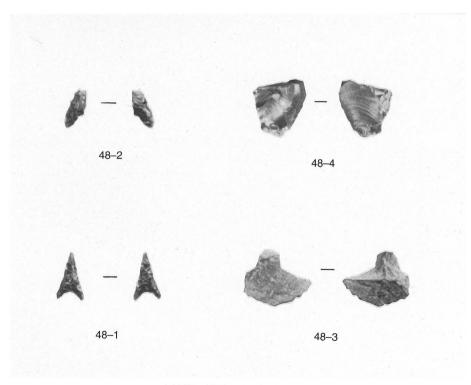
F-5.6、G-5.6区出土陶磁器(上段:表、中段:裏)



F-5.6、G-5.6区出土土器



七渡瀬Ⅱ遺跡石器(敲石)



七渡瀬Ⅱ遺跡石器(石鏃ほか)

第Ⅱ部 千年比丘古墳群



はじめに一千年比丘丘陵の概要

千年比丘の丘陵は、島根県金城町長田に位置する南北に延びた全長約300 m の丘陵である。 長田川によって形成された幅約350 m ほどの谷に突き出し、北へ700 m 離れて七渡瀬 II 遺跡が 位置し、これを見下ろすように位置する。

この丘陵には、従来から 積石経塚1基が知られてい たが、隅田正三の踏査によっ て古墳らしき地点が2ヶ所 指摘された。その後、1990 年冬に田中義昭、大谷晃二 らが隅田の案内で現地を踏 査し、経塚を含め5ヶ所の 遺跡およびその候補地を確 認した。まず、丘陵先端に 直径約20 m ほどの円墳(1号 墳と呼称)、丘陵中央に全長 約40 m の前方後円墳(2号墳 と呼称)、その中間に数基の 段状遺構(墳墓と推定・A 地区と呼称)、2号墳の南、 丘陵最高所に積石経塚、丘 陵南端に長さ約40 m にわた る平坦地とその南端にわず かな高まり(墳墓と推定・ B地区と呼称) などである。

これらの観察は、これまで原始古代の墳墓資料が皆無であったこの波佐・長田の盆地において、首長墓と集団墓の存在を推定させるものであった。さらに、丘陵北側の水田には、弥生時



第1図 千年比丘丘陵地形図・圃場整備前 (S=1/2500)

代末の集落遺跡である長田郷遺跡が知られており、これとの関連も注目された。こうした中で、 波佐・長田地域の原始古代史の実態を解明するために、千年比丘丘陵の遺跡の内容確認の必要性 が痛感されるにいたり、町史編纂の基礎資料作成にあわせて、遺跡の確認調査を金城町教育委員 会が行うこととなった。

調査の結果は、1号墳が古墳時代初頭の円墳であることが確認できた以外は、他は原始古代の墳墓であることを確認することはできなかった(以下本文中では、便宜上、「2号墳」として記述する)。丘陵南端の B 地区では、近世ないし近代の火葬場状の遺構を検出した。なお、積石経塚については、金城町教育委員会によって1994年に測量・実測調査が行われたが、その成果は本報告には掲載していない。

1、調査の経過

(1) 発見と予備踏査

1990年冬 金城町の隅田正三の案内で田中義昭、 大谷晃二らが千年比丘丘陵を踏査する。丘陵先端に 直径約20 m ほどの円墳状の高まり(1号墳と呼称)、 丘陵中央に全長約40 m の前方後円墳形(2号墳と呼称)、その中間に数基の段状遺構(墳墓と推定・A 地 区と呼称)、2号墳の南、丘陵最高所に積石経塚、丘 陵南端に長さ約40 m にわたる平坦地とその南端に わずかな高まり(墳墓と推定・B 地区と呼称)など を観察した。

1・2号墳はかねてより隅田によって古墳ではないかと指摘されてきたが、今回の表面観察によってもその可能性が高いと思われた。ただ、いずれも墳端が明瞭でなく、採集遺物も皆無であり、断定はできなかった。まずは、正確な測量図を作成して詳細な形態の検討を行う必要が痛感された。

その夜、波佐公民館にて、地元有志の参加を得て、



予備調査風景(1990年冬)

本日の踏査成果を大谷が報告、田中が原始古代史の 概説を講義した。石見地方の他の墳墓遺跡の事例紹 介や、波佐・長田地域により首長墓の出現の問題、 古墳から見た畿内地域との関連、隣接する集落遺跡 である長田郷遺跡との関連など、千年比丘の「古墳 群」の調査がこの地域の原始古代の研究にどのよう な意味をもつかについて説明を行った。

1991年2月20日 「2号墳」の測量調査を行う。平板により、200分の1、1 m コンターの略測であるが、墳形の概要を知ることができた。きわめていびつな前方後円形であることが観察された。

(2) 第1次調査(1991年)

1次調査は、1号墳と「2号墳」の形態を正確に把握することと、発掘調査への備えとして、測量調査と一部試掘を行った。調査は1991年8月6日~8月12日まで、述べ7日間行った。調査参加者は、次のとおり。一町仁市・植田義法・上山信人・澄川久信・隅田正三(西中国山地民具を守る会)・大谷晃二・三浦正樹(浜田高校教諭)・内田浩司・茅島智子・川崎陽子・久保長生・追田 稔・佐々木幸美・田原千恵・徳田 裕・中田貴子・西島 圭・藤本恵実・槙岡 泉・村上志津子・山口貴志・山脇州裕(浜田高校歴史部)・鈴木一有・清野孝之(大阪大学学生)・佐藤雄史(小郡市埋蔵文化財センター)・内藤大拙(金城町教育委員会)。

8月6(火) 雨。朝から小雨が降り続く。8時45分、 内田・大谷・茅島・佐々木・中田・山脇は浜田高校 を出発する。金城町教育委員会で内藤と合流し、打 ち合わせ、器材の搬入を行う。11時に宿舎・川根 荘に到着。雨のため、現場に出ずに宿舎で平板測量 の方法を学習する。昼食後、現地までの案内板を作成する。3時に雨が小降りになったため、現地へ行き、器材の搬入と「2号墳」の測量に着手する。「2号墳」後円部にコンター1本を入れ、雨のために4時半に作業を終了する。

8月7日(水) 川崎・村上が参加。明け方の小雨 も上がり、9時に出発する。9時半に作業開始。午 前中、「2号墳」の後円部 T 4杭に1班、前方部 T 4 -2杭に2班が平板を立てる。宿舎に帰り、昼食をと り、午後から作業を継続する。後円部と前方部の形 状が徐々に現れる。各部のコンターは、後円部の増 頂部はほぼ円形であるが、1m下がると三角形に近 くなる。前方部の前端はやや丸みをもち、直線とは ならない。また、角も明瞭な角をなさない。細部を みると前方後円墳であるとはにわかには決めがた い。後円部西側のスロープに角礫が露出しており、 葺石の可能性も指摘されるが、山石であり、川原石 ではない。午後、2時半に松本岩雄が器材を持って くる。1班に参加する。松本氏と発掘区の検討を行 う。前方部前端と北くびれ部にトレンチを設けるこ とを決める。4時45分に調査終了し、ミーテイング。 5時15分に下山する。

8月8日 (木) 一日中曇・晴と調査しやすい気候となる。本日は新しい参加者 (久保・田原・西島・藤本・三浦・槙岡・山口)を加えて、3班を設営し、1号墳の測量を開始する。T2に平板を立て、ほぼ墳頂部とその周辺部を測る。1班はT4-1に平板を立て、くびれ部上部を測り、2班の図と接合を行う。2班(藤本・佐々木・茅島・田原)はまず、T4-2に平板を立て、前方部の裾まわりを測る。その後、T4-4に平板移動し、周辺部を測る。大谷は各班をまわる。昼頃、島根県文化課の角田徳幸が来訪。1号墳は古墳でよいのではないか、さらに段築があるのではないか、などの指摘を受ける。

8月9日(金) 晴のち曇。昨日の続きの作業を各班で行う。午前中に大阪大学の清野孝之・鈴木一有が参加。昼に福岡県小郡市埋蔵文化財センターの佐藤雄史の参加を得る。これにより新しく4班(大谷・佐々木・山脇・内田)を設定し、2号墳の杭を増設する。 $T4から T3-3 \sim 9.8 \, m$ 、 $T5 \sim 9.1 \, m$ と2本のプラスチック杭(以下プラ杭)を打つ。前方部前端に $T4 \sim 5 m$ で33.7281 m にプラ杭、西へ28.511 m に木杭を打つ。 $T4-1 \sim 5 m$ 3 m へプラ杭を打ち、これから北へ直角に2m、さらに6m へと計3本の



1次調査(「2号墳」測量風景)

プラ杭を打つ。くびれ部の発掘前の写真撮影を行う。この後者2本の杭により 3×1 m のトレンチを設定して発掘を開始する。表土を剥いだところで作業を終了する。表土下の土層は黄褐色の軟質のものであり、地山の風化土層か盛土が流出した土と推定される。1班はT4-1で昨日の続きを行い、午後からT4-3へ移動して北くびれ部をほぼ測り終わる。2 班はT4-4で昨日の続きを行い、南くびれ部の墳丘部分から周辺地形へ一部及ぶ。

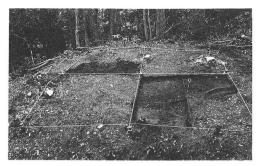
8月10日(土) 昨夜からの豪雨も9時ごろにあが り、現場へ向かう。徳田・隅田が参加。1班はT4 から T3-3の途中の杭に平板を立て、その後に T4 からT5の途中に立てて後円部を測量する。2班は T4-2からさらに東の杭に立て、前方部前端を測 る。昼から栃木県埋蔵文化財センターの内山敏行が 参加する。3班は、1号墳の墳裾を完全に終了する。 明確な墳裾は見られないが、ほぼ直径20m、高さ3 mの円墳と判断する。4班は、昨日のトレンチの掘 り下げを行う。昨日の黄褐色土の下に明瞭な地山面 (明黄褐色土)を検出する。調査区内で地山面のテ ラスなど墳裾と思われる部分が検出されないため、 さらに1.5 m 北へ拡張する。地山面は急激に傾斜し て落ちるものの、やはりテラスはない。しかし、調 査区の北で約0.9 m もの堆積土があり、自然地形で これほどの流土が堆積する理由が不明である。

8月11日(日) 一町・上山・植田・澄川が参加。 1班は、T4-5から後円部南を測り、T4-6から後 円部北を測る。3班の1号墳との尾根の接続を目標 とするが、及ばない。3班は、T3、次いでT3-2 から段状の尾根を測る。一番下の段まで測る。段の 状況はコンターによりほぼ現れる。4班は、くびれ トレンチを下へと延ばすと同時に、T4から西13 m の杭から北西へ2 m 区画でグリッドをあける。従来から葺石、造り出しの可能性が指摘されていた部分である。その結果、石が列状に並び、造り出しの裾の葺石の可能性が考えられた。北辺も段状に落ちている。ただし、来訪者の角田徳幸はなお、岩脈の可能性も指摘する。全体的な状況からは直径20 mの円墳と判断される。10時から現地説明会を行う。地元の人は6人程度である。

8月12日(月) 晴。迫田が参加。調査最終日であ る。1班は、1号墳と2号墳の中間の尾根のA群を測 量し、尾根上の接続を完了する。段状の小古墳はあ まり明瞭には図に現れない。3班は、昨夜発見され た1号墳のコンターの矛盾修正を行う。これらの 後、1班・3班は2号墳の傾斜変換線などを記入して 測量調査を終了する。4班は、天候のため発掘区の 写真撮影を後にまわし、実測を行う。造り出し状の 石列を大谷が、くびれ部トレンチのセクションを清 野が行い、藤本・中田がこれを補助する。実測終了 後、3時ころから写真撮影を大谷が行い、4時過ぎ に終了する。この段階で、くびれ部トレンチのセク ションの上部、造り出しの裾よりもやや下に段状の 遺構が存在することが注意された。これは地山削り だしによるものであり、これを前方部の墳裾と見る 意見も出される。この場合、この前方部の裾が下が りながら、前端部へ向かうと、前方部前端の傾斜変 換の上部のものに続くと見られる。これまで、前方 後円墳の場合、その裾を下にみがちであったことが 反省として感じられる。これにより、本墳は前方後 円墳の可能性も考えられるが、この場合、造り出し 状の遺構の評価が課題としてのこる。こうした問題 を含め、最後の現地ミーテイングを行い、埋め戻し を行う。器材をかたづけ、5時半に下山する。6時 半には宿舎を撤収し、金城町教育委員会で器材をか たづけ調査を終了する。

(3) 第2次調査(1992年)

2次調査は、昨年の墳丘測量調査の課題を解明するため、1号墳と「2号墳」の発掘調査を行った。調査課題は、これらが本当に古墳であるか否かの解明を第一に置いた。調査は1992年7月21日~8月16日まで、述べ27日間行った。調査参加者は、次のとおり。田中義昭(島根大学教授)・久米 基・増野晋次・村瀬 誠・矢野 司(島根大学学生)佐々木勝(奈良大学学生)・沖田孝志・中谷祥平(司計



2次調査(1号墳調査区設定)

高校生徒)・池田一男・一町仁市・上山信人・金田 重之助・隅田正三・塚本貞義(西中国山地民具を守る会)・宇川徳美・梅岡季好・大谷晃二・若本徳子 (浜田高校教諭)・井川美穂・上野・直子・坪屋美 奈子・山下憲子・茅島智子・川崎陽子・佐々木幸美 (浜田高校歴史部)・小郷利幸(津山市埋蔵文化財 センター)・澤田秀美(東京都埋蔵文化財セン ター)・井川成則・岡本利道・内藤大拙(金城町教 育委員会)。

7月21日(火) 晴。大谷晃二・佐々木勝が現地で、 どこをどう掘るかを詳細に討議する。千年比丘古墳 群が本当に墳墓群なのか否か。墳墓であることを確 認するためには、埋葬施設を見つければよい。そこ でまず、1号墳の墳頂部を発掘することにした。

7月22日(水) 晴。とは言ってもでたらめに掘るわけにはいかない。埋葬施設が出た時にその構造を詳細に知ることができるよう、計画的に発掘箇所を設定しなければならない。「タヌキ掘り」は厳禁である。はやる気持ちを押さえて1号墳、「2号墳」の調査区を設定する。両方の頂上を4分割する形で設定する。北東のものをI区として反時計回りにⅡ・Ⅲ・Ⅳ区と呼称(第2図)。1号墳はT2杭を中心に2×2mのグリッドを4つ、「2号墳」もT4杭を中心に3×3mグリッドを4つ設定する。「2号墳」の発掘前の状況写真を撮影する。

7月23日 (木) 晴のち曇。いよいよ1号墳の発掘に着手。I区とⅢ区内をL字形に発掘。厚さ5 cm の腐植土の下から黄褐色の砂質土を検出。墓壙の痕跡を見つけるため土の色・質の違いに注意しながら、少しずつ削っていく。I区西側では地表下15 cm で風化した花崗岩のブロックを検出する。地山であろうか?

7月24日(金) 晴。1号墳 I 区から、ついに土器 片が発見される。高坏などの脚部かと推定された (後に鼓形器台の脚部であることが判明)。これに より1号墳は墳墓であり、その時期が古墳時代前半 期のものと考えられるに至る。これまで遺跡である 確証がなかったため、一同歓喜。Ⅳ区も掘り始める。 7月25日(土) 晴。本日より島根大学生(増野晋 次・村瀬誠・矢野司)が加わる。津山市教育委員会 の小郷利幸が来訪され、調査に参加。千年比丘丘陵 も賑やかになる。大谷が午後から参加。1号墳は、 I区で墓壙の角を検出。Ⅲ区でもこれに対応する墓 壙を検出する。 I 区ではさらに、この墓壙の北側に 花崗岩のブロック(地山か)を挟んでもうひとつ落 ち込みがあり、もう一基の墓壙の存在が予測され た。土器片もさらに2点出土し、墓壙上の供献土器 と推定される。千年比丘1号墳には複数の人物が埋 葬されているのである。ここで1号墳の調査目的 は、埋葬施設の数とその構造、さらに土器による築 造時期の追求へと拡げられた。Ⅱ区の発掘を開始す る。調査人員の増加により、「2号墳」の発掘に着 手。まず、Ⅱ区とⅢ区の表土を除去すると、北西か ら南東にかけて岩脈が走ることが確認される。Ⅱ区 で土色の異なる部分が検出。墓壙の期待が高まる。 7月26日(日) 晴。1号墳は、昨日検出した墓壙 プランの追求を進める。北側の墓壙が明瞭となる。 主軸は中央墓壙と平行しない。Ⅲ区で中央墓壙の西 小口を追求するが、地山が風化し、埋土との区別が つかず難行する。調査区各所でさらに土器片が出 土。高坏ではなく、鼓形器台であることが分かる。 古墳時代前期の小谷式に似ている。1号墳の時期が ほぼ確定する。「2号墳」は、昨日の墓壙らしきも のを追求するが、確定せず。Ⅱ区西側へ50×50 cm で調査区を拡張する。大谷が午後から参加。

7月27日(月) 晴。1号墳は墓壙輪郭を追求。中央墓壙のプランがⅢ区のさらに西側へと長くのびる可能性が指摘された。さらに、北墓壙部のプランはⅢ区では検出されない。「2号墳」は、Ⅲ区の発掘を開始。墓壙らしきものつかめず。波佐小学校5・6年生が見学に来訪。30分の説明に熱心に聞き入る。

7月28日(火) 晴。1号墳は、北・中央主体の西側輪郭がつかめない。Ⅲ区・Ⅳ区の南よりでさらに一基の墓壙を検出する(南主体)。3つの主体部が確認されたわけだが、3人はどのような関係であろ

うか?「2号墳」はI区の発掘を開始する。3箇所で土色の違う部分が見られる。これが墓壙なのか、 地山の風化斑なのかを追求する必要がある。波佐小 学校生徒が8人見学に来訪。昨日と同じ子も見え た。

7月29日(水) 晴。1号墳は中央墓壙と南墓壙の輪郭の一部がよくわからず、調査が難行。墓壙検出の効率をはかり、小さな土器片を取り上げるため、写真撮影とレベルを記録する。北・中央墓壙の追求のため、II 区を幅30 cm のベルトをのこし、北側と西側へ拡張する(II N 区、II W 区)。同様にII 区も西側へ拡張する(II W 区)。大谷が午後から参加。見学に来訪した吉川正氏と石見町教育委員会の中田健一を交えて墓壙プランを検討する。「2号墳」は、明確な地山を確認するため、II 区南壁にそって幅50 cm で断ち割りを入れる。これにより、地山は一部の岩脈を除き、完全に風化しており、黄褐色の砂質土であることがわかった。この断ち割り区中央と西端で地山を切る落ち込みを見つける。ついに墓壙か。TSKの取材あり。

7月30日(木) 晴。1号墳は、ⅡN区で地山を検出。北墓壙はベルト内で終息する可能性が高まる。
Ⅲ区西端で明確な地山が検出し、中央墓壙はⅢW区に及ばないことがわかる。「2号墳」では昨日のⅢ区断ち割り区中央の落ち込みを観察したところ、その上にある根による地山の風化・撹乱と判断された。また、I区・Ⅲ区の精査により、墳頂の半分に岩脈が走っていることも判明し、その範囲には墓壙は存在しないことが明らかとなる。「2号墳」が墳墓でない可能性が高まる。大谷が午後から参加。

7月31日(金) 晴のち曇。1号墳は、Ⅱ区で中央墓壙の西端を検出。昨日、Ⅲ区で検出した西端とずれており、さらに検討を必要とする。南墓壙は輪郭を全周確認する。記者発表にそなえ、調査区の清掃をする。「2号墳」は、調査区の半分を断ち割り、確実な地山を確認する。Ⅱ区断ち割り区西端の墓壙らしきものは、その底を検出する。その位置が墳頂の西端であることから墓壙であるとの考えに疑問が持たれる。新聞記者来訪。

8月1日(土) 雨のち晴。朝から激しい雨のため、 午前中は作業を休止する。本日から浜田高校生が調 査に参加。9時半ごろ、浜田から大谷・若本・井川 が宿舎へ到着。また、別途に藤原が宿舎へ到着す る。午前中、田中・隅田・岡本・大谷・若本・藤原 らが、公民館で出土土器を実見する。昼食後、松江 から松本岩雄夫妻が宿舎を訪問され、午後ともに現 場へ向かう。

本日の作業は、墓壙の輪郭をさらに精査する。 1号墳は、Ⅱ区、Ⅳ区で墓壙の確認作業とセクションの精査を行う。その結果、中央墓壙の輪郭がⅣ区でも検出される。

「2号墳」は、調査区全域で地山が検出。なおも確

認のためⅢ区を断ち割るが、やはり地山であること を確認する。墳頂周辺部は、かなりやわらかい風化 土層である。Ⅱ区断ち割り区西端も墓壙らしきもの も、プランでの検出ができず、やはり地山の風化に よるものと判断された。こうして「後円部」の埋葬 施設の存在は否定されたが、埋葬施設部分が流失し た可能性も想定された。そこで、調査方針を変更し、 「2号墳 | 各所で人為的な加工の有無を確認するこ とにし、「前方部」の調査に着手した。「前方部」 と「後円部」は別々な古墳ではないかとの指摘もあ り、主軸に沿った調査区(3・4区)を設定する。3時 半ごろから掘り始めるが、表土下数cmで地山らしき 層が検出される。詳細な検討は翌日へとおくった。 8月2日(日) 晴のち曇。1号墳は、Ⅲ区北壁とⅠ 区南壁の分層・実測を行い、記録を正確にとる。 2号墳では「前方部 | 3・4区を精査し、ほぼ地山面 を検出する。「前方部」が別の古墳であることを示 すような溝・掘り込みなど一切なし。また、1次調 査で「造り出し」の可能性が指摘された「くびれ部」 の高まりと礫を確認するため、2区を再発掘し、こ れを南へ拡張する。昨年検出した礫が南へと続くこ

8月3日 (月) 晴のち曇。1号墳は、 Π 区と Π N区とのベルトを除去し、ここで墓壙ラインを検出。これにより北墓壙の輪郭がほぼ確定する。 Π 区・ Π 区

とを確認する。



2次調査(「2号墳」上でのミーティング)

の東壁を、I区・II区北壁を実測する。土層の観察によると、中央墓壙上の土器と土は中央にむけて落ち込むように堆積している。このことから墓壙の中には本来、木の棺があり、それが腐ったために落ち込んだものと推測された。また、III区西側のベルトを除去し地山を確定し、中央墓壙の西端はII区での墓壙ラインに一致した。これで、3つの墓壙の輪がすべて明らかとなる。北墓壙のみが軸が大きくずれており、埋葬の時期差を反映しているのでは?との意見も出される。「2号墳」は、「前方部」の埋葬施設の有無と「前方部」前端の加工の有無を確認するために5・6区を設ける。5区は地山を検出し、何もなし。墳頂部に念おしの断ち割りを入れ、記録をとるため、分層に着手。2区を拡張し、礫の範囲を追求する。状況は岩脈のようである。

8月4日(火) 朝から曇空に強風と肌寒い一日であった。朝、昨日まで1号墳の指揮を担当した佐々木勝が宿舎を去る。1号墳はI区西壁と調査区全景の写真撮影後、東西方向のベルトを除去する。土器数点が出土する。鼓形器台片で1個体分と思われる。意図的に破砕したものの可能性が指摘される。「2号墳」は、「前方部」の墓壙の有無を念おしするため、1×1.2mで7区を設定するが何もなし。2区は礫の検出を継続し、これが岩盤・岩脈であることが確認される。4時半からの七渡瀬Ⅱ遺跡の担当も含めた調査参加者全員による現地ミーテイングで田中が調査の概要と意義を参加者に説明する。1号墳は中央墓壙のみを発掘し、南・北墓壙は現状保存と決める。

8月5日(水) 晴。1号墳は、Ⅳ区西壁と2区東壁 の分層と一部実測を行う。南北方向の土手のうち、 中央墓壙にかかる部分を除去する。中央墓壙の全貌 と土器の散布状況が明らかとなる。土器は使用後に 破砕され、ばらまかれたものと推定された。さらに、 中央墓壙上の中心に人頭大の石が立てられているの が、発見された。墓の目印か、それとも死者の霊の 鎮魂のためか。こうした墓上の礫は出雲地方の弥生 墳丘墓に多く見られる。さらに、発見時には小谷式 と思われた鼓形器台も破片の増加によって、若干古 い型式の可能性も考えられるようになった。従っ て、弥生時代末から古墳時代初頭と時期に幅をもっ て考える必要が生じてきた。夕方、土器検出状況の 写真撮影を行う。「2号墳」は、I~Ⅳ区の実測を 継続し、3~6区のセクションを実測する。6区は、

図化するとわずかな傾斜の変換点が認められるが、 人為的なものと言い切ることはできない。2区の礫 は、コの字形にめぐり、「造り出し」のように見え たが、岩盤と一連のものであることが判明した。た だし、岩盤を削り出して成形した可能性もわずかに のこる。

8月6日(木) 晴。1号墳はいよいよ中央墓壙の内部の掘り下げを開始する。掘り下げは土層観察用の土手を十文字にのこして慎重に行う。墓壙内の調査は木棺痕跡を平面で検出することを目指す。30㎝ほど下げるが土層断面、平面ともに良く見えないため、横断でサブトレを入れ、墓壙底を先に確認する方針をとる。墓壙上面から約1メートルで地山を検出する。さらに平面を精査し、50㎝ほど掘り下げたところで、土色の違いから、木棺の痕跡の輪郭を確認する(PL5(1))。横断でも木棺痕跡の立ち上がりが観察された。「2号墳」は、I~IV区平面図に25㎝コンターを入れ、岩脈をスケッチする。2区は清掃して、写真撮影を行う。金城町学校給食調理場の職員方が来訪。TSK取材。

8月7日(金) 曇のち晴。1号墳は、木棺の輪郭の精査を行う。特に小口の形態の確認に務める。東側で、小口板らしきラインを認める。側板との関係に注目するが、側板が小口板を飛び出すラインが認められない。方形の箱形の木棺であろうか。「2号墳」は、清掃し、写真撮影を行う。本日で「2号墳」の調査は終了する。ここまで、「2号墳」ではついに、埋葬施設も、人為的と断言できる加工の跡も、一片の土器も発見されなかった。このように「2号墳」が墳墓であることが否定されたことにより、調査参加者一同は落胆と同時に新たな課題を持つにいたる。それは、1号墳に前後する首長墓はどこにあるかという問題である。4時半ごろ、金城町史編纂委員会の方々が来訪。BSSのTV取材。台風の接近に調査の進展が危ぶまれる。

8月8日(土) 台風の接近により雨。午前中、1号墳は、昨日に続き木棺プランの追求を行う。10時ごろ雨が激しくなり、作業中止、下山。午後から現地説明会を予定していたが、台風が正午に直撃する。このため、公民館での説明会に変更する。七渡瀬 II 遺跡は、雨の中行う。昼に東京都埋蔵文化財センターの沢田秀実が来訪、調査に参加する。その後、浜田高校生らで七渡瀬 II 遺跡と1号墳出土の土器の水洗を行う。夜、宿舎において田中の指導によ

り拓本実習を行う。

8月9日(日) 雨のち晴。1号墳中央墓壙木棺の輪郭の精査を継続し、この面で実測・写真撮影を行う。千年比丘丘陵の南端にわずかな高まりがあり、低墳丘墓の可能性が考えられた。このB地点の調査は3次調査で行う計画であるが、その予備調査を行うこととする。低墳丘墓と想定した高まりのほぼ中央に直径1m、深さ20cmほどのくぼみがあった。これが盗掘坑ではないかと考え、これを中心にL字形に調査区を設定する。表土下で黒色土の落ち込みがあり、その中に拳大の角礫多数が検出される。その状況を確認したところで、予備調査を終了する。

8月10日(月) 晴。わずか2名で調査を行う。1号 墳中央墓壙内の土層の断面を詳細に観察する。木棺の形態や設置状況の復元を検討する。午前中土層とにらめっこするが、陽が当り土色が見えない。4時過ぎごろ、日陰になり、ようやく目が慣れて土層の違いが見えてくる。その結果、棺の外側には、赤色と黄色の土を交互につめたものであることが明らかとなる。調査期間が押し迫っている。6時過ぎ下山。毎日新聞・読売新聞・朝日新聞・山陰中央TV など取材に来訪。七渡瀬Ⅱ遺跡は若干の補足調査と実測を残して終了。参加者の大半が帰る。宿舎もさびしくなる。

8月11日(火) 曇のち雨。朝一で縦断セクションの分層を行い、写真撮影。午後から実測の準備にとりかかるが、突然の通り雨に大谷・久米ともにずぶ濡れになり、作業中止。

8月12日(水) 曇のち雨。七渡瀬 II 遺跡を終えた 増野が1号墳の調査に参加。大谷・久米・増野の三人で調査を継続する。縦断セクションの実測を行い、終了後ベルトを除去する。この時、立石の下端を検出する。断面によって立石の掘り方がないか検討するが、掘り方はなかった。これにより、①埋土の過程で立てられた。②周囲を土でかためた、の二つの可能性が考えられた。昼食後、雨が降り、作業終了。5時ごろ、水汲みに登り、小雨のためテントを張って作業する。横断セクションの断ち割りと分層を行う。この観察により、互層状の埋土の上部に異なる土があり、これが木棺蓋の埋土と考えられた。6時半終了。

8月13日(木) 一日中降ったり止んだりで、テントを張ったりたたんだりと作業がはかどらない。曇

のち雨。朝一で横断セクションの分層を行う。認識は昨日と変化なし。写真・実測を午前中に終了する。これに平行し、縦断の断ち割りを行い、先の実測図に加筆する。午後から、立石のみのこし、横断面の土手を取り払い、墓壙内の土手は完全に除去した。立石と墓壙の位置関係を写真で記録をとり(PL4(4))、石の出土状況を1/5で実測して石を除去する。中心の立石をのこし、その形態と位置関係を詳しく検討する。この石は砥石であることが明かとなるが、なぜ砥石がこのような場所に?墓壙底に数 cm のこした部分で木棺プランをさらに検出を試みる(PL7(1))。雨のため5時55分で作業を中止する

8月14日(金) 曇のち晴、一時雨。墓壙の底近く で、再度木棺の輪郭を精査する。側板側は東西の墓 **壙壁まで地山ブロックを多く含む土であり、小口外** 側がより粒子の細かい土である。従って、側板が小 口より突き出す形で小口板を挟む棺構造である。西 小口幅が狭いことから、被葬者は東枕であることも わかった。この確認面で写真・実測を行う。いよい よ副葬品の出土を期待して、墓壙底の最後の土を除 去するが、ついに遺物は一点も出土せず。一同落 胆。墓壙底を精査したところ、墓壙底での地山が、 東側が白黄褐色土で、西側が赤褐色と色調に違いが あることを確認する。棺外埋土の互層は、これによ るものであろう。とすると、なぜ地山の埋土を互層 に埋めるのか。赤褐色土と黄褐色土は色調こそ異な るが、もとは同じ地山の風化土である。特にしまり を良くする効果があるとは思えない。つまり、この ことは埋める手順を反映しているものではなかろう か。つまり、墓壙東半の白黄褐色土が東側に掘り上 げられ、西半の赤褐色土が西側に掘り上げられる。 これが、交互に棺外を埋めているわけであるから、 2ヶ所に掘り上げた土を複数の人間が交互に投げ入 れた情景を思いうかべればよい。木棺内を掘り下げ るが、副葬品はなにもない。これはどうしたことか、 埋葬された人物の権力と性格を暗示するものか?盆 休みで帰省した地元の方々が数名来訪。

8月15日(土) 曇一時雨。完全に墓壙内を掘り上げ、全体の清掃。実測と写真撮影を行い、1号墳の調査を終了する。「2号墳」のセクションの補足を行い、器材をすべて降ろす。後日の埋め戻しを計画して、現場から撤収。日は完全に暮れ、帰宿。本日の来訪者8名あり。

8月16日(日) 朝、一同浜田と松江へ向け帰る。

(4) 第3次調査(1993年)

3次調査は、1号墳の墳丘規模の確認と、A区、B区の遺構の確認を目的として行った。調査は1993年8月7日~8月25日まで、延べ12日間行い、実測など若干の補足調査を1994年3月2日と3月29日の2日間行った。調査参加者は次のとおり。久保谷浩二(金城町教育委員会)、大谷晃二 (浜田高校教諭)、沖田孝志、中島 暢、中谷 平、向山 薫(司計高校生徒)、宇川徳美、梅岡季好、沖田サツヨ、沖田茂、小池久子、北林照子、能海数美、横路末広。

8月7日(土) 曇。A区の調査にとりかかり、発掘区を設定する。 $T3-3\sim T4-6$ まで、さらにT4-6から南 ~ 1.5 m 拡張した 9×1.5 m のトレンチを設定する。その部分の発掘前の状況写真を撮影し、掘り下げにかかる。地山を検出する。B 区は、昨年度の調査区の再発掘と清掃を行う。

8月8日(日) 晴。1号墳。南トレンチを精査し、 地山面をきれいに出す。わずかな傾斜変換が2箇所 で見られるが、明確にはならない。墳丘の北裾を確 認するため、北トレンチを設定する。発掘前の状況 をカラーで撮影 (モノクロは撮影しない) した後、 発掘開始。表土剥ぎと若干の精査を開始する。A区 では、発掘区をさらに精査する。地山面が段状をし ている状況がはっきりしてくる。発掘区全面で地山 を出すが、確認のため東壁沿いに幅50cmで断ち割 りを入れる。土壙・溝などの遺構も遺物もいっさい 検出されない。写真撮影はしない。B区は、検出さ れていた礫の性格と範囲を追求するため、発掘区を 南へ3×2 m で拡張する(1区)。表土下からさらに礫 が散在する。礫や、中心杭に集中する状況が見られ る。地山面まで下げる方針で掘り下げを続ける。さ らに、南端部の平板測量をさらに継続する。

8月9日(月) 晴。1号墳は、南トレンチを南へ拡張し、地山の傾斜変換の状況の確認につとめる。清掃後、昼から写真撮影をし、断ち割りを入れ、地山の確認とセンクションの観察を行うが、詳細な確認は明日へおくる。北トレンチは引き続き掘り下げを行う。A区は、発掘区を掘り下げ、地山まで完全に下げる。墓壙などの遺構はやはりない。断ち割りにより状況を確認する。B区は発掘区全体を掘り下げる。東西セクションの写真撮影と実測を行い、このベルトを除去し、角礫の検出を継続する。角礫はす